
響く

綾瀬タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

響く

【Nコード】

N0217B

【作者名】

綾瀬夕カ

【あらすじ】

主人公・望は、将来を有望視されたピアニストだったが、1年前のある日から家に閉じこもるようになる。そんな彼女を見守る人たちの愛を彼女は受け止められるのか、という物語です。最終話まで掲載したあと、もう一度修正を加えました。物語はそのままです。

雨のあと(前書き)

第1話ですが、プロローグのようなものです。展開はかなり遅く、
どれだけ長くなるか分かりませんが、どうぞお付き合ってください。
そして意見、感想もよろしく願います。

雨のあと

テレビが関東圏の警報を解除したと告げたとき、家の真上で騒がしく降る雨が、積乱雲の早い移動とともに遠くへ行こうとしていた。止んでいく雨の音は、なぜだか次第にはつきりと、私の耳に響いてくる。

孤独を恐れる心が、そうさせているのか。

それとも、雨の音以外ここには何も無いのだということ、思い知らせようとしているのか。

* * *

さっきの雨のあと、虹が半分だけ弧を描いているのを、私は昔見た記憶を引っ張り出して想像していた。外ではきつと、いくつかの色が混ざった虹が咲いているだろう。

「お姉ちゃん」

姉がはっと振り返った。

「ゴミ、よろしくね」

「も〜」

玄関の隅に置かれた袋を掴み、姉は出て行った。

鉄筋の階段を降りていく足音が響く。私はそれに合わせて、人差し指で白い鍵盤を思い切り叩く。「レ・ド・レ・ド・レ・ド・レ・ド」
繰り返される音の連鎖。消えてゆく。

テレビは今週の天気を予想していた。今日の雨を最後に、梅雨は晴れるらしい。

いつも外れる天気予報士の言うことだから信じてはいないが、たとえよく当たると評判の予報士が同じことを言ったとしても、私にはたいしたことではない。

雨が降っても、雪が降っても。私には傘が必要ないのだ。

ソファに置きっぱなしにしていたテレビのリモコンに腕が当たったようで、突然汚い音が大声で鳴った。

うるさい！

テレビは好きじゃない。いろんな音が重なり合って、不細工なメロディーが鳴る。人の声も、効果音も、流れる音楽も。単体では綺麗な音を奏でているのに、全てを一度に演奏すると、なぜこんなにも汚く、醜いのだろう。

そしてテレビを消す。一瞬の静寂のあと、外からは子供の遊ぶ声と飛行機の通る音が聞こえてくる。またいつもの日常だ。

私の部屋のほとんどを、グランドピアノが占領している。

白い鍵盤は長い間ここにいてという存在を十分に発揮している。汚れたクリーム色がそれを証明する。

黒い鍵盤は長い間ずっとここにいてのに、黒は黒のままだ。

「こんにちは」

午後になって、岬さんがやって来た。

「今日はヒメヒマワリが入荷したんですよ。あんまり綺麗だったか

ら僕も思わず買ったちゃいました。これはノンさんの分」

差し出されたヒメヒマワリを、じっと見る。岬さんはいつもの花瓶を持ってキッチンへ向かう。

「このガーベラ、3日前に持ってきたんですね。もう元気なくなっちゃったなあ」

3日前はその綺麗さを見せつけるように咲いていたのに、赤も黄色もオレンジも、みんなしゅんとした表情をしていた。そういえば一度きりしか、水を替えていなかった。

岬さんはガーベラを新聞紙に包み、持ってきたヒメヒマワリを花瓶に挿した。そしてグラントピアノの上の、いつもの場所に置いた。「うん、綺麗じゃないですか。やっぱりノンさんにはこういう花がいいな」

ガーベラの入った新聞紙を抱え、岬さんはスニーカーを乱暴に履いた。

「来週にはうちのイチオシの花が入荷するんですよ。楽しみにしてくださいね」

鉄筋がいい調子で鳴る。「ミ・レ・ミ・レ・ミ・レ」

確かにヒメヒマワリは綺麗に咲いている。

ヒメヒマワリ

「ごはん、ちゃんと食べてないでしょ」

冷蔵庫を開けて姉が言った。おととい作ってくれたから揚げは1つつまんだきりで、ポテトサラダは上に乗せられたミニトマトを食べただけだった。けれど、一応「食べて」はいる。

「そんなことないけど」

「ほら、おとといの唐揚げもまだこんなに残ってる」

「肉は好きじゃないんだよね」

「野菜も嫌いつて言うじゃない」

姉はため息をついて冷蔵庫を閉めると、グランドピアノの上の花瓶を手を取った。

「これって何て名前だっけ？」

「ヒメヒマワリ」

「そうそう、ヒメヒマワリ。こないだのガーベラも素敵だったけど、これは本当にキレイね」

姉は椅子に座って、うつとりとそれを眺めた。

「私にはこういう花がいいって」

「岬さんが？」

「そう」

「へえ、岬さんには望がそう映ってるんだ」

姉は微笑んで言った。「うん、そうかもね。望は明るいコだもん。太陽みたいっていうか」

「それはお姉ちゃんのほうじゃない？」

姉はふふつ、と笑って花瓶を戻した。

「岬さん、今度はどんな花を持ってきてくれるのかな」

「来週イチオシを持ってくるって言ってたけど」

「えーっ、来週は旅行に行くんだよね」

姉はがっかりした様子でヒメヒマワリを小突いた。「残念だなー」

「旅行に行くの」

「あ、そうなの。ヒロがね、一緒に家に来てほしいって」

そのとき、胸がキリッと音を立てて、何かが突き刺さるのを感じた。

「それって旅行なの」

なんとか声は出せた。まるで色あせてしまったようなかすれた声だった。

姉は私の声の震えには気づかなかったようで、嬉しそうに弾んだ声で言った。

「だって私もヒロも、久しぶりに帰るんだし。だから観光も兼ねてね」

そんな人なのだ。

痛み出した胸が鼓動を大きく打つのを、姉に聞こえないうちに押し込める。

そして冷静さを精一杯演じて、幸せそうな姉を精一杯祝福する。

「よかったね」

「うん、ありがとう」

そう言った姉の笑顔の横では、ヒメヒマワリが姉のほうを向いていた。

ヒメヒマワリは私じゃない。あのひとだ。

それは姉の隣で綺麗に咲いている。

* * *

「なんでまたヒマワリなんですか」

次の週、岬さんはやって来るなり花瓶をキッチンに持っていった。そして新聞紙に包まれたそれを花瓶に挿して、再びピアノの上に置いた。

岬さんのイチオシは、ヒメヒマワリよりも強く咲き誇った大きなヒマワリだった。ソファに座っている私をまっすぐ見下ろしている。「ノンさん、今しゃべりました？」岬さんは驚いてこっちを見た。

私はその言葉に反応して、少し睨むような目つきで黙ったまま彼を見上げた。

「いやいや、嫌味で言ったんじゃないですよ」

岬さんは慌てて取り繕った。「ノンさんの声、久しぶりに聞いたんで」

「そうだったかな」

「いつも僕の独り言ですからね」

と言って、軽く微笑む。「今度からは何でもいいから返事してくれたら嬉しいな」

「考えときます」

「はは、よろしくお願いしますよ」

岬さんは髪をくしゃっと掻いた。

「せっかくのノンさんの質問に答えないと。『またヒマワリ』って言うてましたよね。それってこれのことですか？」

岬さんはそう言うて、力を失くした小さなヒメヒマワリを左手に、まるで今咲き始めたような大きなヒマワリを右手に持った。

「この2つの花は全くの別物ですよ」

岬さんはヒマワリをピアノの上に戻し、ヒメヒマワリを新聞紙に包んだ。

「ノンさんなら分かるはずですよ」

そう言うつと彼はいつものように乱暴に靴を履き、家を出た。

岬さんの言葉が妙に頭の中に残って消えない。

鉄筋の音色を弾くことさえ忘れてしまうほどに。

ヒメヒマワリ（後書き）

まだ恋愛要素が全然ですね。

でも中盤の部分が恋愛の要になってくるのですよ。

今後をお楽しみに。

猛暑の影響

蒸し暑い日が続いている。

こんな時期は、ピアノの調子も悪くなる。

夏が性懲りもなく気温を上げていくせいだ。

「うわっ、暑いですね。この部屋蒸してますよ」

ドアを開けた岬さんの頬からは、たちまち汗が流れ出した。

「これ、ちよっと置いておきますね。すぐ戻りますから」

そう言っただけで岬さんはまた外へと飛び出した。鉄筋が早足で鳴っている。

置いていった新聞紙の包みからは、中身がはみ出していた。

「ノンさん、暑くないんですか？」

岬さんは帰ってくるなり肩に掛けていたタオルで汗を拭いた。手にはコンビニの袋をぶら下げている。さっきはそんなもの持っていなかった。

がさがさと袋をあさり「はい、ノンさんにも」と、カップアイスを出した。私が受け取ると、自分も同じそれを袋から出した。

暑さのせいだろうか。

アイスを食べている2人の空間には、会話がなかった。まるで試験会場3分前の光景のようで、何か張り詰めた空気が流れているのを感じる。

もともと会話らしい会話さえ成り立ってはいないが、いつもなら岬さんは独り言でも諦めずに話す。

それが今は、岬さんも何も話さない。
アイスはまだ半分も残っているのに、その時間がとても長く感じる。

「暑いなあ」

堪らず沈黙を破ったのは私だった。

普段はそんなこと思っけていても口には出さない。そのせいか、岬さんは少し驚いている。

こないだのように、「今しゃべった？」なんて思っけているのだからか。

溶け出したアイスはどろっとした液体になっけて、もはや掴むことができなくなっけて。

「ノンさん、クーラーつけないんですか？」

岬さんの首筋からは汗が流れ、袖を肩までまくりあげたTシャツに滲んでいた。何度も汗をぬぐいながら、岬さんはとうとう我慢できなくなっけてようだった。

「温度差が急激に変化するのには好きじゃないんです」

「それにしてもこの部屋、外より暑いんですよ」

「花も枯れますか？」

「うーん、あんまり暑いとかかわいそうですね」

そう言っけて岬さんは花瓶のヒマワリを見た。「やっぱりちょっとやられちゃっけてますね」

そして今日持っけてきた新聞紙の包みと一緒に、キッチンに持っけていった。

「これの中身、見ました？」

岬さんが新聞紙の包みを左手で軽く上げた。

「飛び出しているじゃないですか、ヒマワリ」

私がそう答えると、岬さんは「ははは、そうですね」と笑っけて新聞紙の包みを開けた。

「夏はやっぱりヒマワリですね」

「もしかして、しばらくヒマワリですか」

別にヒマワリが嫌だと言っているんじゃないけれど、とりあえず聞いてみた。

「だって、ノンさんヒマワリ好きでしたよね」

「なんですか」

「ノンさん、僕が初めて贈った花って覚えてます？」

「え？ ヒマワリでしたっけ」

「……覚えてないみたいですね」

岬さんは表情を少し曇らせた。100%の悲しさではなく、幾分か切なさを含んで。

「また来ますね」

それだけ小さく口にする、岬さんは力なくスニーカーを履いた。

鉄筋は音を立てず、ピアノは音色を弾くことができない。

* * *

過去を思い出すのは得意じゃなく、苦手で、嫌だ。どんなに楽しかったことでも、その楽しさは未来まで持っていけない。そのときだけのものにする。

それでも私の中には抜けないものがある。心太こころたのように、羊羹ようかんのように、私の過去も記憶の筒からつるつと押し出されればいい。あわよくば、その後は美味しく頂くことができればいいとも思う。

暑さはさらに調子を上げて、ついにピアノの音が狂ってしまった。

「あれっ、何してるの？」

「暑さで音がおかしくなったから」

姉がやって来たとき、私はグラランドピアノの甲羅を剥いでいた。

「直せるの？」

「分からない」

「ちよつと、そんないい加減じゃだめよ。余計壊れちゃうんじゃない？」

姉が私をけん制して、自分が甲羅の中を覗き込んだ。

「うーん」姉は甲羅の中を丁寧に見回した。

「直せるの？」

「まさか」

姉は即答して、その中から頭を起こした。「望で分かんないのに、素人の私ができるわけないでしょ」

じゃあさっきの唸りは何だったの、とは聞かないでおく。

代わりに言った「私だって素人なんだけど」という言葉は、直後に後悔することになった。

「何言ってるの、望は立派なピアニストじゃない」

と、姉は当然のように言ったのだった。

止んだ音

姉から見た私。

立派なピアニスト。

何の違和感もなく発したのだと思う。でもそれは、今の私にとって苦痛でしかない、過去の私。

姉にとって私は、あのころから何も変わっていないのだろうか。

“立派なピアニスト”だったころとは、なにひとつ。

* * *

「そういえば、花瓶は？」

「………ああ、そこ」

私は顔を振って窓辺を差した。

いつもの場所にはないのは、昨日の夕方、夕日に染まったヒマワリを見ようと花瓶を窓辺に持ってきたままだったからだ。

おととい岬さんが持ってきたヒマワリは、今の私のようにちょっとだけ力を失くしていた。限りなく、人には分からない程度に。

「わ、ヒマワリじゃない」

姉の声はたちまち喜びを表し「そういえば、先週のイチオシって何だったの？」と続けた言葉にも弾みを持たせた。

「ヒマワリ。それはまたおといに持ってきてくれた、2度目のヒマワリ」

「そうなんだあ。ヒマワリだったのかあ」

姉の声はまだ弾んでいる。

そしてヒマワリから目を逸らさずに、じっとそれを眺めている。

静かになったその空間で、私は岬さんの言葉を思い返していた。

その2つは全くの別物ですよ。

私の心はすでに容量が余っていないはずだった。けれど、わずかに空いていた隙間にそれは上手く入り込んでしまったらしく、拭い捨てることができないまま今も私に問い続けている。

「ねえ」

早く消したいそれを、私は姉に持ちかけた。

「そのヒマワリと、前のヒメヒマワリの違いって分かる？」

姉とそれを共有したほうが、まだ私の心は救われる。できることなら姉が持つていつてくれればいいのに、とさえ思った。

「なあに？ クイズ？」

「岬さんが言ったの。その2つは全くの別物なんだって」

「他に何か言ってた？」

「私になら分かるって」

「それで、望は分かったの？」

「分からない。ヒメヒマワリも、同じヒマワリ的一种でしょ？ なのに全く違っていて、どういうこと？」

姉は少し考え込んで、それから私を見てふふっ、と微笑んだ。

「分かったの？」

「ううん」

「じゃあなんで笑ってるの」

「望がこんなに話すのってなんだか久しぶりだなんて、そう思った
ら嬉しくなって」

「……なにそれ、全然考えてないんじゃない」

姉は持っていくどころか、共有さえしてくれなかった。

結局それは変わらず私の中に居続けることになった。

「あ、ねえ。ピアノのことだけどさ、直しに来てもらおうか」

嫌な予感がして、胸がまた鼓動を打ち始める。今度は痛むことさ
え忘れてる。

「……誰に」

「ヒロ」

胸は段階を踏まず、ドからラへ、一気に鍵盤を駆け上がった。鼓
動はあまりにも強く、あまりにも激しい音で、脈を打つ。

「いいよ、忙しいでしょ」

「このピアノのためなら来てくれるよ」

そうだろうね、と心の中で思う。けれどすぐに、そう思ったこと
を捨てる。

「とにかくいいよ。そのうちまた音が狂って元に戻るかもしれない
し」

「そう？ 分かった。あ、じゃあ私行くね」

姉は窓辺の花瓶をいつものピアノの上に置いた。

ヒマワリはまっすぐに私を見下ろしている。

姉はまっ白なサンダルを履くと、ドアを開け、くるっとこつちを
向いて言った。

「ねえ、ヒメヒマワリとヒマワリの違い、望なら分かるよ」

ボタンとドアが閉じられると、姉が置いていった言葉は、とうと
う私の心を埋め尽くした。

鉄筋の音はもう聞こえない。

演奏

狂ったピアノを仕方なく弾くのは嫌だ。
だから私は、その狂いを計算して弾く。
心をとうとう埋め尽くしてしまったものたちを、消し去るとまで
はいかなくても、少しの間でも忘れたくて、重たい鍵盤の扉を開い
た。

岬さんの言葉。 姉の言葉。

昔から、ピアノを弾いている間は何もかもを忘れることができた。
その時間だけは、私は本当の自分でいれたような気がした。
そしてもう一度だけ、あの幸せな空間に浸りたい。

いつも叩くだけだった白い鍵盤に、そっと指を配置した。ほんの
少し力を加えれば、あとは体が覚えている通りに鍵盤をなでるだけ
だった。

けれど、何度かためらった。

ためらって、指を鍵盤から離れた。

やっぱり弾きたくて、鍵盤に触れた。

ためらって、ためらって、今だけはピアノを弾いていいか、と、
自分に許しを得た。

応えが返ってこないのは当然だった。
でも私は分からないフリをして、沈黙を「YES」と判断した。

ピアノは弾かないと決めた自分への罪悪感があつて、一番難易度の高い曲を弾いた。1年間のブランクはそう簡単に取り戻せるものじゃないと言ひ聞かせるために。

ひとつ目の音を弾く。

そうすると、あとは何も考えなくても指が動いた。

（ああ、覚えているものなんだ。体は心よりもずっと素直で、いくら忘れたいと思つても、ピアノに触れるだけで過去の感覚が甦ってくるんだ）

しばらくの間、時間になるとほんのの少しの間。私は過去に感じていたものと同じ快感に浸っていた。

けれど、楽譜でいう3ページ目に差し掛かったところで、演奏をやめた。

指が止まってしまったのだ。

幸福感の背後に、もう二度と演奏はしないと誓つた、過去の自分の気配がした。

楽譜はこの先20ページは続いている。

鍵盤の扉を閉めようとして、突き当たる視線を感じた。

その先を向くと、そこには岬さんが立っていた。

「こんにちは」

岬さんはいつも通りの明るい挨拶をした。

「お邪魔だったかな」

私は鍵盤の扉を閉めた。「そんなことないです」

岬さんの手には、下を向きながらもはみ出したヒマワリが握られている。

「ヒマワリ、相当人気があるみたいですね」

私が目線を落として言うと、岬さんはその手のヒマワリを見た。

「そうですね。でも、人気があるから持ってきてるんじゃないですよ」

岬さんは続けて言った。「ノンさんにはヒマワリがいいなと僕が思うから、持ってくるんです」

そして私は現実に戻り、いつかの姉の言葉を思い出す。

「岬さんには私がどんな風に映ってるんですか」

「え？」

「ヒメヒマワリを持ってきたとき、私にはこういう花がいいって言っていましたよね。それを『岬さんにはそういう風に映ってるんだ』

って、姉が」

「ノンさんはヒメヒマワリとか、ヒマワリとか、そういう花がいいんですよ」

「それはもう聞きましたよ」

岬さんはそれ以上語ろうとはしなかった。でもそれは、話すのが面倒だからというようには見えなかった。

「ところで、さっき弾いてたのって、モーツアルトの『ピアノソナタへ長調K332』ですよね？」

と岬さんは言った。

私が視線に気づいたのは演奏をやめたあとだったけれど、岬さんが聴いていなかったという確証はどこにもなかった。

ただ、誰に聴かせるためでもなく弾いたあの短い演奏は、誰にも聴かれなくなかった。

そんなことを今さら言っても仕方のないことだというのは分かつ

ている。それなら防音完備の部屋で、玄関の鍵はしっかりとかけて弾くべきなのだから。

「もしかしてピアノの音、狂ってませんか？」

と岬さんは言った。

「なんで分かるんですか？」

私は驚いて言った。

音は確かに狂っていた。暑さでおかしくなっていた以来、結局は直ることもなく、それどころか次の日さらに狂ってしまったのだった。けれど、私はその特徴を上手く捉えて弾いていたつもりだった。弾いていたときは何の違和感もなかったはずだ。

それとも、私には綺麗に聞こえていても、実は音色は狂ったままだったのだろうか。

私の音が狂ってしまったのだろうか。

「いや、僕もピアノをやっていたんですよ」

岬さんがそう言って、そういえば曲名を簡単に当てたことに気づいた。

さらに気づいた。狂った音の歪みも曲名も、ピアノを習っていたくらいの人に分かるレベルじゃない。音色はほぼ完璧に狂いを隠していたし、演奏だってまだ最初と言っていいほどのところで止めた。学校で習うような聴き馴染みのある部分はイマドキの曲で言うサビで、この曲で言うと楽譜の8枚目くらいだ。私はまだ弾いていない。「この人、何者なの」と思った。けれど口には出すつもりはなかった。

「よかつたら調律しましょうか」

「え？」

「ノンさんが意図的に狂わせたのなら余計なお世話になりますけど」「道具はないですよ」

「ああ、僕が持ってますよ。あとでまた来ていいですか」

岬さんは持つてきたヒマワリを花瓶に挿した。

力のなくなつたヒマワリは新聞紙に包まれ、岬さんと一緒に出て

いった。

新しくやって来た3度目のヒマワリは、私から目を逸らさない。

* * *

それから岬さんが来たのは、部屋を夕日が紅く染めるころだった。本当に調律できるんですね」

手際よく調律をする岬さんの横で私が言った。

「いやだなあ、冗談だと思ってたんですか？」

岬さんは笑って返す。

「調律なんて、ピアノを習っているだけの人にできるものじゃないですよ」

私は少し彼を試すように言う。

あなたは何者なんですか、の意味を込めて。

「人は誰も意外性を持つものじゃないですか」

「花屋さんがピアノの調律までできるなんて、初めて聞きましたよ」「それを言うならノンさん、僕はあの曲を生演奏で聴いたのは初めてです」

「.....」

ちょうどそのとき真っ赤な夕日がこの部屋と同じ高さまで降りてきて、窓辺に立つ岬さんの姿はなんだかとても眩しかった。

思わず目を閉じてしまったのは、そのせいかな。それとも.....

再び目を開けたとき、そこに立っていたのはいつもの岬さんではなかった。

真っ赤な陽に体が染まり、まるで燃えているように見えた。

絶望の日、あのひとの姿も同じように眩しく、真っ赤に燃えてい

た。

疑問（前書き）

前回の最後からの続き・・・とは考えないでみてください。

いちおう第2章突入です。

ここからは回想も多くなってきて、過去の謎が少しずつ解けてきます。

まだまだ終わりそうにはないですけどね。

疑問

大歓声が私に向けられる。

私はその期待に応え、この先に見える道を歩んでいく。

まだ知らない。

振り返ると、道には何度も塗り変えられた跡が残っている。

* * *

岬さんが花を届けてくれるようになったのは、いつからだっただろうか。

出会ったときはあまり覚えていない。花を持ってきた日とそう離れていないはずだが、その頃の記憶は別のことに使ってしまった。その容量が多すぎて、岬さんとの出会いは引っ張り出すのが難しい。

初めて花を持ってきてくれたのは、出会って間もない頃だったと思う。

私の家は鍵をかけることがないので、いつも姉や岬さんは勝手に入ってくるのだけれど、あの日、岬さんは入ってくるやいなや、持ってきた花瓶に持ってきた花を挿してピアノの上に置いた。

あのころの私は、自分でいうのもおかしいけれど、本当に、死人のようだった。

部屋のあまりの汚さに姉が掃除をしに来るようになって、そのうち何もかもをするようになった。それが今の状態だ。

姉が毎回必ず大きな手提げ袋を持ってやってくるのは、部屋に来る前に食糧や生活用品を買ってくるからだ。

そんな生活が当たり前になる、だいぶ前。閉じこもるようになった初めのころ。

「花がひとつあるだけで、気分が全然変わるんですよ」

と言って、花を置いたのだ。

もちろん私は何の返事もしなかった。

どこにいても花が見えるように計算されたその場所は、そのうちいつもの場所になった。ソファに座っていても、キッチンに立ってみても、ピアノの椅子に座ってみても、視界には必ず花が映っている。

そのときの花は確か、ヒマワリじゃない。

ヒマワリ好きでしたよね

僕が初めて贈った花って覚えてます？

岬さんのこの言葉には、何が隠されているのだろう。ますます分からなくなった。

ヒマワリに目をやると、それはまっすぐに私を見つめていた。

そしてあのヒメヒマワリは、今も私には小さなヒマワリでしか映っていない。

ヒマワリもヒメヒマワリも、その姿に私はあのひとを重ねてしま

う。
あのひとは、このヒマワリのように私をまっすぐに見てはいないけれど。

* * *

「岬さん、私にはあなたがよく分からないです」

それは、岬さんが3度目のヒマワリを持ってきたときだった。

「僕がですか？」

岬さんは驚きながら自分を指差した。そして笑いながら言う。

「僕は至って単純な男ですよ」

「私もそう思っていました」

「それもなんだかなあ」

と言って岬さんはいつもの場所に花瓶を乗せた。

「僕の何が分からないんですか？」

「全部です」私は続けて言った。「岬さんの言葉が、私には理解できません」

「それって、僕の伝え方が悪いんですか？」

「いいえ」

私はきっぱりと言う。

「きつと何か意味があるんだと思います」

岬さんは黙って、私の言葉に耳を傾けた。

「岬さん、もう2度ほど、あなたに聞きたいと思っていたことがあります」

「何ですか？」

「あなたは何者なんですか」

アイスを食べていたときの、あの空間が再現された。どちらかが何か話さなければいけない、どちらも追い詰められているような、あの空気。

「これだけは言うておきます」

今度は岬さんが空間を壊した。

「僕はただ単純に、ノンさんのことが好きなんです」

それ以上は何も聞けなかった。岬さんによってそうされてしまった。

「……………そうですか」

私も岬さんのなんだか曖昧な告白を流した。その言葉にはどんな真意が隠されているのかと、私はまた疑ってしまったのだ。

「分かりました」

私がそう言うと、岬さんは安堵の表情を見せた。ほんの一瞬だった。

「ノンさん、僕もひとつだけ聞いていいですか？」

私は何も答えずに、岬さんの言葉を待った。

「あなたが僕に全てを話してくれる日は、やってきますか？」

何を指しているのか。

岬さんは私のことを一体どこまで知っているのか。

私はどう答えるべきなのか。

「それは、」

そう言いかけたとき、玄関のドアが豪快に開いた。

「うわっ、あつっい」姉が顔をパタパタ仰ぎながら入ってきた。

「あれ？ お客さん？」さらに間髪入れずに言った。「もしかして、岬さん？」

急に変わった陽気な空気に岬さんは驚きながらも「あっ、はい」と返事をした。

「うわあ、初めてだあ。いつも話聞いてたんですよ。私、望の姉で叶かなといいます」

「あっ、お姉さんですか。初めまして」

岬さんは慌てた様子で頭を下げた。

「いつも楽しみにしてるんですよ、お花持ってきてくれるの」
「それは良かった」

姉と岬さんが話す傍らで、私はここで姉が来てくれて良かったと思っていた。

言いかけたあの言葉は、岬さんは知らないほうがいい。
たとえ岬さんが私の何を知っていたとしても、

それは、一生やってこないと思います。

3度目のヒマワリだけが、私をじっと見つめている。

来客

人生はもう狂っている。

これから先どんなことが起きようと、私は悲しんだりしない。
絶望はすでに経験した。

この生活が始まって1年が経った。とても長い、変わり映えのない毎日だった。

姉と岬さんにしか会っていない。

けれどそれは、対人恐怖症になったんじゃない。

人との関わり合いは苦手だけど嫌いではない。

姉と岬さんは誤解している。同じようで違うその意味を、きっと間違えている。

私は外に出なくなっただんじやなく、家に閉じ籠もるようになったのだ。

* * *

また寝苦しくなって目が覚めた。

暑さにはもう慣れた。原因は夢だろう。

同じ夢を見てはいつも同じ場面でその先を拒み、耐えられなくなつて目を覚ます。それがもう、去年からずっと続いている。

夢の続きを見ることはできない。それはそのまま絶望への下り道になっている。うっかり片足でも乗せてしまったら、あとは他愛もなく転げ落ちるだけだ。

「ノンさんとお姉さんって、全然違つんですね」

昨日、姉が帰つたあと、岬さんは言った。

「……はい、よく言われます」

私は少し怪訝な顔をして言う。

「陰と陽つていうのかな、お姉さんは明るい人でしたね」

「じゃあ、私は暗い人間ですね」

「いや、そんなことありませんよ」

岬さんは慌てて否定する。私はそれをあしらうような、また気にしていないような表情で言った。

「いいですよ、本当にそうだから」

「全く正反対の違った魅力があるってことです」

そんなフォーはいりません、と言おうとした。

けれど、そのあとの岬さんの言葉にかき消されてしまった。

「僕は初めてノンさんを見たとき、ものすごい勢いで心を掴まれましたからね」

と岬さんは言った。

それはどんなふうに。

どうして。

私は何をしていたの。

聞きたいことが多過ぎたが、そこまで聞く気はなかった。
なんとなく、ただ面倒だった。

だから私は、どうしても知っておきたいことだけを聞くことにした。

「いつのことですか？ あんまり覚えてなくて」

別のことでいっぱいになってしまった岬さんとの出会いの記憶は、未だ思い出すことができないままだった。

「さあ、いつでしたっけね」

「教えてくださいよ。思い出すかもしれない」

「ノンさんは、僕と初めて会ったときは覚えていませんよ」

「なんでですか」

「なんででしょうね」

そう言っつて岬さんはふつと笑った。

また分からないことが増えてしまった。

そろそろ私の心は容量オーバーで、近いうち記憶の全てが張り裂けてしまいそうな不安を感じた。

ただでさえ私の道は傾いてしまっているというのに、下り坂はさらに角度をつけていく。

片足を滑らす日は、もう近いのかもしれない。

* * *

今日はクーラーをつけることにした。

好きじゃないなどと言っている場合ではなくなった。

暑さでピアノが狂って岬さんにもう一度調律してもらおうのもなんだか悪い。

そしてこないだ姉が言ったように、あのひとが調律しに来ようものなら、それこそ坂は直角にでもなっけてしまおうだ。そうならもう絶望まで落ちるのを止めることはできない。それだけは避けなかった。

絶望はもう経験したが、もう経験したくない。

また玄関のドアの開く音がした。岬さんは昨日来たばかりなので、今週はやって来ないだろう。そうすると、姉しかいなかった。

私はピアノの前の椅子に座って、ヒマワリを見ていた。

ドアの音には反応しない。どうせ姉か岬さんだろうから、「どうぞ」などと気を使うことはしない。姉も岬さんもそれを知っている。だから2人はいつも部屋に入ってきて、それぞれが勝手に行動する。姉なら料理・洗濯・掃除を。岬さんなら花の入れ替えを。

今日はなぜかドアの開く音がして、それから音が止まっている。

少し不思議に思った。けれど、たいした不思議ではなかった。

もう一度ドアの開く音がした。直後に「あつ、いいの。勝手に入って」という姉の声が聞こえた。

何を言っているのだろう、とまた不思議に思った。今度はだいぶ不思議だった。

「おじやまします」

それは姉の声ではなく、男の人の声だった。

聞き覚えがあった。

「あ、クーラーがついてる。珍しいね」と姉が言った。

「最近の暑さは異常だからね」と男の人は言った。

「でも望めたら、こないだまでクーラーなしの生活だったんだよ。部屋の中がサウナ状態だったんだから」と姉が言った。

「それはピアノだけじゃなく、体にも悪いなあ」と男の人は言った。

「うん、私もそう言ってるんだけど」と姉が言った。

私はヒマワリから目を逸らさない。
逸らせない。逸らすことができない。

姉と、その隣にいる男の人が誰だか分かっているから。

来客（後書き）

次回は10月13日午前中に更新です。

意外な事実（前書き）

この物語に隠されている謎のひとつが判明します！
ほんの一部分くらいですが。

意外な事実

夕方になって窓を開け放すと、低空飛行をしていたツバメが部屋に迷い込んできた。そのまま部屋の中を自由にかき回して、また何事もなかったかのように窓を抜けていった。

その直後に一瞬の静寂。

セミの鳴く声がして、静寂が解かれる。

再びピアノに向かい合うと、思いきり強く鍵盤を叩いた。

いくつもの音が部屋の中に汚く響く。

心の中を表す、絶望にも近い音が。

次の日にたまらず鍵をかけると、初めてチャイムの音を聞いた。何度も何度も鳴り続け、そのうち鉄筋が音を鳴らした。聞き慣れた岬さんの足音がした。

18 に設定したクーラーを朝からずっとつけていた。

1時間ほど経って、体の芯から冷えてしまっているのは分かっていた。そのうち頭が割れるように痛み出して、耐え切れず夏用のタオルケットに包まれてもまだ寒くて震えていた。

それでもクーラーは止められなかった。

窓を開けると涼しい風が入り込んでくるはずの時間になっても、なお。

目が覚めたときクーラーは止まっていて、少し暑かった。

太陽がちよと顔に当たる高さまで上がっていた。目を開けようとすると眩しくて、また閉じる。

窓側から顔を背け、花瓶に顔を向けると、ヒマワリが私を見ていた。遠目にその綺麗さが、やけに目立っていた。

ベッドから起き上がると頭の中がぐるんと回って、気持ち悪くて吐いた。

ようやく吐き気が落ち着いても頭痛は引かなくて、むしろ悪化しているようだった。

よつんばいになっていた体を起こし、ふらふらとピアノに向かった。

両手でピアノを探り、よろめきながら前進する。

まるで妖怪みたいだった。あてのない手は、見えない何かと戦っているようにも見えた。

右手がピアノを捉えると、私はもう一度その上の花瓶を見た。

朝日に照らされたヒマワリは真新しく、元気だった。

たしか、前（といっても何日前か分からないが）見た3度目のヒマワリは花びらが丸まって、少ししおれていたはずだった。

ここにあるのはそれではない、というのは明らかだった。

そうなるのであれば、4度目のヒマワリだろうか。

つまり、岬さんが来たということだ。

鍵がかかっていたはずのこの部屋には（たぶん昨日）一度来て、確かに帰っていったのに。

「不思議な人」

思わずそう呟いた。椅子に座ってヒマワリを小突くと、自然と心が温かくなった。

それはヒマワリの力か、岬さんの力か。

* * *

額がひんやりしたのを感じて目を覚ますと、ぼやっとした膜の先には岬さんが映った。

「あ、起こしちゃいましたか」

額には冷たいタオルがのせられたばかりだった。

私は椅子に座ったまま、鍵盤の扉に被さっていた。右手はヒマワリの花瓶に伸びたままだった。4度目のヒマワリを確認したあと、そのまま眠ってしまったらしい。

起き上がると冷たいタオルは額からずり落ちて、足の上に落ちた。足の甲がひんやりとして、気持ちいい。

「岬さん、どうして」

岬さんはタオルをひよいとすくい取り、またそれを私の額にのせた。けれどそれはまたすぐに落ちて、今度は目の上に被さった。

「昨日部屋に鍵をかけたでしょう。気になって夜にもう一度来たら、中からすごい冷気を感じたんで、管理人さんに言っけて開けてもらったんですよ。そしたらめっちゃめっちゃ寒いしノンさんは震えながらうなされてるしで、もうびっくりしましたよ。夏に暖房つけたのなん

て、初めてですよ。どうしてあんな無茶なことしてたんですか。風邪引きたかったんですか？」

岬さんは少し怒っていた。

私がかすつと笑うと、「なに笑ってるんですか」とまた怒りながら言った。

「なんだか岬さんがいつもと違って余裕ない感じだったから、思わず」

私がそう言うと、岬さんもそんな自分に気づいたようで、上がり調子だった眉毛と肩がみるみるうちに落ちていった。

「普段の僕は余裕なんてないですよ。ノンさんの前でだけです」

「なんで私には普段の顔を見せないんですか」

「……………」

岬さんは黙っている。なんだか言いにくそうに、私を見たり下を見たり、目をキョロキョロさせている。

「なんでですか」

私はさらに念を押して聞いた。

すると岬さんはハア、とため息をついてもう一度私を見た。

まるで自らの罪を告白する覚悟を決めた罪人のようだった。何かを訴えかけるような、そんな目をしていた。

「普段の僕だったら、ノンさんは家に入れてくれないと思ったんですよ」

「どうしてですか」

「年下は相手にしないでしょ」

「年下？ 誰がですか」

「僕です」

「僕って、岬さんのことですか」

「僕しかいないじゃないですか」

「ちよつと待ってください」

頭の中が混乱して、忘れかけていた頭痛が戻ってくる。

そういえば確かに岬さんのことはその名前しか知らなくて、年齢

や下の名前、もちろんその他のことは何も知らなかった。

それでも私よりは年上だろうと最初から思っていた。

なぜなら私が覚えている岬さんは最初から、落ち着いた口調に優しい話し方、空気の読み方なんてものまで完璧だったのだ。

けれど、だからこそ岬さんの言ったとおり、家にも入っていたのかも知れない。

もし年下だと分かっていたら……。

「岬さん、何歳なんですか」

「22です」

「え?!」

実際は2歳も下だった。岬さんの分からないことが増えていく一方で、初めて分かった彼の素顔だった。

そのはずが、逆に岬さんという人を分からなくさせた。

「初めてじゃないですか?」

と岬さんは言った。

私の返事を聞かないまま、岬さんはまた言った。

それが彼を特別にさせた、最初の言葉だった。

洗濯と選択

体調も回復して土曜日、初めて自分で洗濯物を干した。

高く遠く広がる空を見た。1年振りだった。

背伸びをした午後は、気分がとても明るくなった。

きつと岬さんのおかげだ。

どこかへ出かけたとは思わないが、外の空気を吸いたくなった。バルコニーに立つことさえ未だ敵わないことで、なぜそうなったかの原因も忘れてはいない。

けれど、小さな窓の柵に小さなハンカチを引っ掛けることはでき
た。

きつと、岬さんのおかげなんだろう。

「初めてじゃないですか？」

と言った彼は「ノンさんが僕を見てくれるのは」と続けた。

そのとき私は、人に、姉にさえ閉ざしていた心を、いつのまにか岬さんには開いていたのだと気づいた。

もちろん全てではなくて、私の心が巨大な冷蔵庫だったとしたらその中の製氷室ほどしか見せていないだろうけれど、それでも凍りきった氷を溶かしてくれた。

そう考えたら岬さんは他の人とは違うのだと、なんとなく感じたのだ。

* * *

鉄筋はまた音色を弾くようになった。

姉は相変わらず、甲斐甲斐しく世話を焼きにやって来た。私の干した小さなハンカチには気づいていなかった。

「もっお、またごはん残して」

「夏バテ」

それだけが理由ではないけれど、文字通り「バテて」いたのは本当だった。

「なおさらちゃんと食べないとだめでしょう」

「支度するのも面倒なの」

「だから一緒に住もって言ったのに」

「やだよ、そんなの」

「カゼひいたとき大変でしょう。こないだは岬さんが来てくれたからよかったけど」

なぜそれを知っているのか。

どこまで知っているのか。

「あ、昨日岬さんに会ったの。ほんとに偶然なんだけどね。そのとき望が寝込んでるから見に行つてあげて下さいって頼まれちゃった。望つたらクーラー止めないまま寝てたんだって？ それじゃカゼひくの当然よお。岬さんがたまたま夜に来てくれたからよかったけど」

「………それだけ？」

「なにが？」

「………ううん、なんでもない」

岬さんは私が部屋の鍵をかけていたことを、姉には話さなかったようだった。

もしかしたら彼は人の心が読めるんじゃないか。

鍵をかけたその意味を、彼は察知しているのかもしれない。

「やっぱり不思議な人」

そう呟くと、心に温かいカイロを当てられた気分になった。小さなぬくもりが、心の中にじんわりと伝っていった。

夜になると遠くの方で花火の音が微かに聞こえて、窓を半分だけ開けた。

ずっと近くなったその音の心地好さに浸りながら、少しだけ過去を忘れて現実を生きた。

* * *

「今日も暑い一日になるでしょう」

アナウンサーは3日続けて同じ言葉を発している。

そしてその通り、朝から蒸した生ぬるい空気が漂っている。

結局のところ、クーラーをつけてもつけなくても、なんだかんだ言われている。

けれど、優先すべきはクーラーをつけるほうだ。

クーラーをつけて頭痛と戦うか。

つけないでピアノの音が狂うか。

頭痛を起こしてまた岬さんに叱られるか。

ピアノの音が狂ってとうとうあのひとが来るか。

選ぶなら、クーラーをつけるほうだった。

洗濯と選択（後書き）

タイトルがシャレになってしまいました。すいません。

最初は「回復と進歩」だったんですが、これには訳があります。

実はクーラーについての部分は後載せです。

もともとその前までだったんですが、それだけではちょっと短いかなと思います、付け加えました。

だからここだけ切り離して考えてもらおうといいです。

ということ、タイトルも変えました。

今回は10月15日の夜に更新です。

頼みごと（前書き）

この回で望の本名が出てくるのですが、読めないかもなんで先に言っておきます。

「あそうのぞみ」といいます。

岬さんの名前も出てきますが、普通に読んでもらえれば合っていると
思います。

頼みごと

今週は行けないの、と姉から電話があつて、急いで冷蔵庫を見ると先週の作り置きがほとんどなくなつてしまつていた。

もともとそんなに食べるタイプではないけれど、さすがに来週末ではもたない。

どうしよう………と考えた結果、岬さんに買い物頼むことにした。

たしか岬さんが来るようになった初めのころ、名刺をもらったよ
うな気がする。

そう思い立つてそこらじゅうをあさつてみる。

もしかしたら姉が捨ててしまつたかもしれないけれど、必要なものだと思つてしまつてくれたかもしれない。

私は姉がよくものをしまう棚を開けた。そこには電気やガスなどの使用量が書かれた紙が、月ごとに分けられていた。

こんなのいらぬのに、と思ひながら奥まで手を伸ばすと、ようやく岬さんの名刺を見つけることができた。

『フラワーガーデン 代表取締役 岬 潤』

という文字が大きく書かれ、その下には住所と電話番号、Eメールアドレスが載つていた。

「代表………取締役………つて、社長?!」

私は思わず叫んでしまった。しんとした1人きりの空間に、久しぶりに自分の声が響いた。

それにしても22歳で社長なんて、岬さんは一体何者なのだろうか。本当に分からない人だなと改めて思う。

けれどまた新しい発見があつた。

岬さんのフルネーム。たった2文字で綴られたその名前は、なん

だかとっても似合っている。

名前も、彼自身も。

単純なようで、きちんと意味が込められている。

名刺には会社の情報しか載っていないので、仕方なく会社に電話をかける。

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

3回目のコールが鳴り終えたとき、受話器をあげる音がした。

「はい、フラワーガーデンです!!」

聞こえてきたのは女の人の、甲高い声だった。若そうな女の人だ。私は一瞬ひるんで、腰が引けてしまった。

見えないはずの女の人が、まるで目の前に立っているようだった。

「あ、あ・・・・・・・・・・」

「はい？」

私は下唇をぐつと噛んだ。

「あの！ 岬さんはいらつしゃいますか？」

「オーナーですか？少々お待ちください」

と言って女の人は受話器を置いていった。遠くの方で他の従業員と話す声が聞こえる。

「・・・・・・・・お待たせしました。すみませんが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「あ、えつと・・・・・・・・浅羽といいます」

「ただいま代わりますね」

すると音楽が流れ出した。この曲はたしかパッヘルベルの「カノン」だ。

目を閉じると、懐かしさがこみ上げてくる。

小学4年生のころに発表会で弾いた曲だ。

まだ私の人生が、とても順調で明るくて、幸せを感じていたときの。

プツツと途絶えた音楽のかわりに、岬さんの声がした。

「はい、お電話代わりました」

「……岬さんですか」

「はい……え？ ノンさん?!」

岬さんの声は電話を伝って私の耳に大きく響いた。

それだけでなく、電話の向こうでもその声は響いて岬さんは周りの従業員たちに「ごめん」と笑って謝っていた。

「どうしたんですか?! 本当にノンさんですよね?」

「ちゃんと名乗ったはずですけど」

「いや、まさかノンさんだと思ってなかったんで。『あそつさん』って、ピンとこなかったんですよ」

「すみません、突然電話なんかして。しかも会社に」

「いやいや、それよりどうしました?」

「あ……」

私はとても言いにくかった。用事というほどのことではないし、まして買い物をお願いしたいという“お使い”を頼むだけなのだ。

「どうしました?」

「……お願いしたいことがあるんです」

「なんででしょう?」

「実は、姉が今週は来れないらしくて、その……食べるものがなくて」

「そうなんですか? じゃあ何か買っていきますよ。ちょうど今日行くところでしたんです。何を買っていけばいいですか?」

「なんでもいいんですけど。野菜とかを何種類か」

「分かりました。7時ごろになるんですけどいいですか?」

「お願いします」

そうして岬さんが両手に大手スーパーの袋を抱えてやって来たのは、7時を少し過ぎたくらいだった。

一度スーパーの袋を玄関に置いて、また外に出て行ったかと思ったら、すぐに岬さんは5度目のヒマワリと一緒に戻ってきた。

「すみません、遅くなっちゃって」

「いいえ、こつちこそ買物なんか頼んじゃって」

「いや、嬉しかったですよ。ノンさんが頼ってくれたのなんて初めてですから」

と岬さんは笑顔で言った。

「僕も少しはノンさんの特別になれたってことかな？」

私は何も言わなかった。

岬さんも、返事を待っていたようには見えなかった。

「頼んでおいて悪いんですけど、ちよつと買すぎじゃないですか」
岬さんがキッチンでヒマワリを入れ替えていて、私は床に置かれた袋を開けてみる。

野菜を、とお願ひしたのは私だけけれど、岬さんは何十種類ものそれを買っていた。さらに肉も動物ごとに、部位別にある。この3つの袋の中だけで、まさに食材の宝庫だった。

「どれが必要か分からなくて、適当に買っちゃったんですよ」

岬さんは照れたように頭を掻いた。

「それにしてもパプリカなんて、イタリア料理作るんじゃないんですから」

私は赤と黄色のパプリカを手にとって岬さんに見せる。

すると岬さんはもう一度頭を掻いた。照れて笑う顔は、なんだか

少年のようだった。

「料理しないんですか」

「男の一人暮らしですからね。いつもだいたい外食で済ますんです」と言いながら、岬さんはいつもの場所にヒマワリを置いた。

5度目のヒマワリも、やっぱりきれいだった。手に持っていたパブリカのつやつやした黄色が、花びらの色ともものすごく似ていた。

「今日はもう食べましたか？」

「いいえ、ちょっとトラブルがあって忙しかったんで。これからです」

そう岬さんが言って、私はなんのためらいもなく、口を開いた。

よく考えてみたら大胆なことをした、と思ったのは、岬さんが帰ったあとだった。

「それじゃあ、一緒に食べますか」

岬さんは驚いた顔をしていた。

お礼

半分だけ開けた窓からは、時折ひやつと涼風が流れ込んでくる。その度に薄いカーテンがなびいて、満月がちらちらと姿を見せる。窓辺にある椅子に座っている岬さんだけが、その月を見ていた。そのとき私は、月とは反対のキッチンに向かっていた。

月からしたら、私は背を向けている。

まるで、わざと見ないようにしているふうに、見えている。

* * *

「びつくりです」

岬さんがキッチンに向かって私の背に声をかけた。

さつきまでピアノの椅子に座っていたと思ったら、いつのまにかすぐ後ろに立っていた。

「ノンさん、料理できるんですね」

「それって失礼な意味ですか」

「単純に、尊敬してるんです。いつもお姉さんがやっていたからっていうのもありますけど、すごく繊細な作りかたというか」

「面倒だからあんまりしないんです」

「それにしても盛り付けとか切り方とか、綺麗ですよ」

そう言いながら岬さんが見ていたのはイタリアンサラダだった。

パプリカをなんとか使おうとしたらこうなった。見た目の色合いやトマトの切り方なんかもおしゃれで、これだけで立派な一品になっってしまった。

他には蒸し鶏と根菜の和風パスタ、サーモンのマリネ、筑前煮、豆腐と豚肉の炒め物などがある。

和洋折衷になってしまったのと品数が多いのは、岬さんのせいだ。けれど、これでもまだ3分の1も使っていない。

「なんかごちゃごちゃになってしまいましたけど」

「いや、こんな豪華な食事は初めてです」

岬さんは喜んでいた。あなたがこんなに買ってくるから、とは言えなくなってしまった。

「食べきれないだろうから、残してください。明日にでも食べますから」

「僕って大食漢なんですよ」

そう言っていたいただきますと手を合わせ、勢いよく食べ始めた。

とても大食漢には見えない体つきなのに、岬さんは次々とたいらげていった。

テーブルに並べた料理が見事に全部消えるのに、1時間もかからなかった。

どうしてもやらせてほしい、と岬さんはスーツの袖をまくり、食器を洗い始めた。

私はソファに座って、その後ろ姿をぼーっと眺めている。座っているせいか、岬さんの背中はとも広く、大きく見える。

仕事帰りの慌ただしさを表すスーツ姿は、岬さんを年上でも年下でもなく、「男の人」だと意識させた。

磨かれていく食器の、カチャカチャとこすれる音だけが静かに響く。

「わわっ、どうしたんですか」

容赦なく見つめる背中からの視線に気づくと、岬さんは言った。

「いえ、スーツ着てるの初めて見たんで」

「ああ……そうですね。初めてですね……」
なぜか岬さんが黙ってしまって、けれど私はそれを不思議には思わなかった。

洗い物を終えた岬さんはアイスコーヒーを2つ淹れた。

私はピアノの椅子に移り、ほんの少しだけぬくもりを残したソファには岬さんが座った。

「今日はありがとうございました」

「いいえ、僕のほうこそ」

「何かお礼ができればいいんですけど」

「お礼なら、食事をいただきましたし」

「それは私のついでみたいなものでしたから」

岬さんは困ったように考え込んで、「それじゃあ、リクエストしてもいいですか？」と言うと、ピアノの上のヒマワリを指差したのではなかった。

「ピアノを弾いてもらえませんか？」

と、ヒマワリの下に敷かれたグランドピアノを指して、言ったのだ。

お互いの目を見合ったまま、しばらくの沈黙。

「ピアノは……もう弾けないんです」

「どうしてですか？ この間のモーツァルトは本当に素晴らし」

「弾けないんです」

私は岬さんの言葉を遮るように言った。

力まかせに出した声がいつまでも響いている。

やけにセミの音がうるさく聞こえるのは。

「すみません。なにもお礼ができなくて」

一瞬の沈黙のあと、

「ノンさんって、律儀ですよね」

と、岬さんはその場によんだ空気を払うかのように、明るいついで言った。

「知ってますか？ お礼をしなきゃいけないほど助けられたのは、僕のほうなんですよ」

それ以上は何も言わず、それ以上は何も聞けないような、明るい笑顔だった。

観念

その足音はあのひとの全てを物語っている。

もしその音が聴こえてきたら、私はもう一度あの暗い闇の中に抛り出されてしまう。

止める術もなく。墮ちていく。

1週間振りに来た姉は少し焼けていて、「旅行」という名の実家訪問のあと、沖縄の海で泳いできたのだと言った。

そしてお土産にと、シーサーの置物をくれた。

「シーサーって守り神なんだって。これからは私の代わりにこの口が望を守ってくれるよ」

「私、お姉ちゃんに守られてたっけ」

「料理、洗濯、掃除。誰がやってたのかな」

「そうでした」

「ふふっ、でもかわいいでしょ」

「顔はブサイク」

「なんでそういうこと言うのよ」

「ひねくれてるもんで」

そう言っソファから立ち上がり、自分と姉のコップを持ってキッチンに向かった。

もつすぐ形がなくなってしまう固体に、さらに新しいものを入れてその上に麦茶を注ぐと、小さかった固体は液体になって麦茶に溶

けていった。

「望、変わったね」

「なにが」

思わずよいしょと言ってしまつのを堪えて、どしっとソファに座りなおした。

「表情とか、行動とか。1年前よりだいぶ変わったよ。外に出なくなつてからは笑うこともなかった。今みたいに自分からお茶を入れなおすとかもなかった」

姉は、かつてなく真剣な顔をしていた。

「岬さんのおかげなのかな」

「そうだと思う」

「……ねえ、もう傷は癒えたんじゃない？ 私もお父さんとお母さんが交通事故で死んだ当時は、シヨックで何もできなかった。でもヒロが側で支えてくれたから、なんとか今は立ち直れた。望にも岬さんがいるじゃない」

「岬さんとはそんなんじゃないよ」

「でも好きなんでしょう？好きな人のためにも元氣にならなきゃだめよ」

「何にも分かつてない！！」

自分の声に驚いて我に返ると、姉もまたびっくりして私を見ていた。

「あ、その……」

「こんにちは」

そこへ岬さんがやって来て、私たちはまた驚いて立ち尽くしていた。

そんな2人を見て、岬さんは軽く首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「いいえ、なんでもありません。じゃあ私は帰ります」

「え？お姉さん？」

「仕事の途中だったんで。岬さんはゆっくりしてってくださいね」

姉はピアノの上に置いていた仕事の書類らしきものを、そっと掴んだ。

「じゃあ望、また来るね」

「………うん」

久しぶりの鉄筋の音色は、別の音に侵されていた。

それは、弾くとまさに不協和音を生み出してしまつように、汚かった。

「お姉さんと、なにかあつたんですか？」

その場に立ち尽くしたまま呆然としていた私を不思議そうに見て、岬さんは言った。

「いいえ、なんでもありません」

乱れたままの心は声に表れてしまった。私は早口で、目を伏せて言った。

すると岬さんは私の心を一瞬で読んだ。岬さんの目が、心の中の感情をコントロールする部分に入り込んできたみたいに。

「なにが、あつたんですか？」

疑問は確信に変わっていた。

私は伏せた目をいったん岬さんに向け、また戻した。

もう、このひとを欺くことはできない、と、心が叫んでいた。

「私は………」

私はついに観念して、過去の自分と再会することを決めた。

どうしても言葉にできなかったものをとうとう形にすると、今の自分に過去の自分がのりうつってきたのを感じた。

そうならもう、止めることができない。

岬さんは、私が話すその言葉をなぞるように、ただ頷いた。

18歳・音楽学校（前書き）

ここから回想に入ります。望の音大時代です。

この回でもフルネームが出てくるのでもう一度言っておくと、「浅羽望」で「あそこのぞみ」です。

18歳・音楽学校

日本最高といわれる音楽学校に入るのは、周りが言うほどそんなに難しいことではなかった。

5人の大人たちの前で、「演奏してください」と言われれば弾いた。

「ピアノは何歳からやっていますか」と聞かれれば、そのままを答えた。

私はピアノを弾くために生まれてきたんです、と。

それだけで、学生たちのほんの一握りしか入れないという特別クラスに入れたのだから、やっぱり簡単だったのだろう。

特別クラスでも難しいことはなかった。

学校全体の生徒が何千人といううちの20人ほどしかいない優秀な生徒のためのクラスと聞いたけれど、私はここにいると逆に、彼らの音に侵されてしまいそうな不安を感じていた。

彼らの演奏は、どれも同じ音色にしか聞こえなかった。

だからサボりがちになってしまったのも、無理のない話だと思つ。

「……………さん、あ……………さん。浅羽望さん！」

目を覚ますと、女の人が立っていた。

「あなたはまたこんなところで授業をさぼって！ 担当教師から報告を受けましたよ」

確か以前にも3回ほど、この中庭で日向ぼっこしていたのを見つけたときの先生だった。メガネに、高い位置での乱れのないだんごヘア。加えてカマキリのような目つき。いかにも、という風貌からしても、どうやら学年主任らへんの立場にいる人らしい。

「ただサボってたんじゃありません。ちゃんと考えてたんですよ」と私も反抗してみるが、カマキリ女には通用しない。

「そんな言い訳はいりません。早く授業に戻りなさい。あなたはあの特別クラスなんですから、しっかりと授業を受けないと」

4度目のその言葉にはすっかり飽きてしまった。

「だいたい、「授業を受けないと」どうなるというのか。私には授業に出ることのほうが、自分のためにならないと知っている。」

特別クラスはピアノだけでなく、バイオリンやチェロ、パーカッションなど、さまざまな楽器における優秀者の集まりで、いわば学校代表のオーケストラである。ピアノ科からは私と、あと2人。他の科もだいたい同じくらいだ。

彼らと演奏をすると、私はその音に合わせなければならない。本当はもっと深く、厚みのある音を出したいのに、彼らとしてはそれができない。

もし1人で自分の音を出そうとすると、担当教師が

「浅羽、合っていないぞ！ もっとみんなに合わせる」

と言つて、私が注意を受けるのだ。

みんなが私に合わせるようにしろ、とは言わないのか。そう何度思ったか、計り知れない。

そしてそれはピアノだけで合わせるときもまた、同じだった。

カマキリ女がついてくるので、私はしぶしぶ教室に戻る。

「私から注意しておきましたので」

と言つてカマキリ女は帰っていく。担当教師もその女には逆らえないように、

「すいません。ありがとうございます」

と、低姿勢でへこへここと頭を下げる。

そして女が帰ったあと、私に

「みんなに迷惑をかけた罰として、お前は今日ひとりで練習だ。オーケストラには入れん」

と、教師ズラをさらけだして言う。

けれどそれこそが、私の望むこの学校での過ごし方だった。

学校を休むことも辞めることもできないので、結局は授業を受けなくてはならない。でないと単位も評価ももらえない。だからあえて授業をサボって、その罰としてひとりで延々と練習曲を弾かされる。練習曲はもう何万回と弾いたので、今さら簡単すぎてつまらないが、自分の音が狂うことはない。

私にとっては「罰」がオーケストラの練習で、ひとりで練習が「当たり」だったのだ。

隣の第一音楽準備室でひとり練習していると、第一音楽室からはオーケストラの合わせが聞こえる。他の部屋には漏れない完全防音なのだが、準備室までにはそうはいかない。私は隣から演奏が聞こえると自分の手を止め、かるく耳を塞ぐ。それでも敏感な耳はその音をキャッチしてしまう。だから私は、オーケストラの練習をするより個人の練習をしるよ、と思っでは、不快な音でいっぱいになった耳の中を、三半規管のずっと奥まで換気するように、思いきりピアノを弾くのだ。

そしてその音は、たとえ練習曲であっても、オーケストラが演奏をやめて聞き入ってしまうくらい美しい音色に響く。

自分でも、恐いくらいに。

そうして授業をサボる常習犯としてのレッテルと同時に、天才ピアニストの称号を得た。

特別クラスの生徒は私のことをサボり魔として見ていたが、決し

て見下すことはなかった。私がいつものように弾かされる練習曲にうっとりとき聞き入っているようにさえ見えた。

その証拠に、私が第一音楽準備室に入ると、彼らの音は小さくなり、次第に止んでいた。

そう、それで良かったのだ。

彼らは私自身に文句があっても、私のピアノには何も言えない。むしろ、憧れの対象として見させておく必要があった。

それこそが、私がこの学校に入学した理由に繋がる第一段階だったのだ。

19歳・入学式

音楽学校に入学してから、もうすぐ1年が経つ。

春の気配はまだ感じられない。

冬の名残りが、寒さという武器を思いきり使っている。まだまだ寒い日が続きそうだ。

早く、柔らかく暖かい光を差し込んでほしい。

桜の木に実をつけてほしい。

花びらの蕾が、むくむくと殻を押し出してほしい。

それは、春がやって来たことのあるしになるから。

4月の初めにようやく開花宣言されたころには、心地よく舞う風が、すでに春を告げていた。

その矢先、春風の名のもとに、珍しくびゅうびゅうと音を立てて吹く風があった。

けれど、まだ蕾が開いたばかりの桜は、その風に負けなかった。

正確には、“負けまいとしていた”。

私はその姿に昔の自分を映しては、桜の強さを羨ましがらずにはいらなかった。

ビクリともしない太い幹、まるで接着剤でも塗られてくっついてあるかのように散らない花びら。

それらをひとつに持った、桜という春の象徴。

私にはない、立ち向かう強さ、自分よりも強いものに反抗する力を、持っていた。

あのころ、私にはそれができなかった。

* * *

「今年の春は、珍しい突風が吹き荒れることや桜の開花が例年よりも遅いことがあります、どこか違っていい」

そう言ったのは、あのカマキリ女だった。

それは壇上の挨拶の初めの言葉であり、手紙でいうところの「拝啓」に続く時事のようなものだ。

そのあとつらつらと話す言葉は耳に入ってはこないが、とりあえず時事のあと、もう20分は経っている。

私はそれを、カマキリ女の横　壇上の幕で隠れているので部分で見えていた。

幕を少しだけ厚くつかむと、講堂に並ぶ生徒の姿が見える。

かなり遠くのほうで、何人かがあくびをしている仕草が分かる。

彼らを含めた大多数が、私と同じようにカマキリ女の話聞いていないのも感じられる。

前のほうにいる生徒たちは、みんな姿勢が崩れていない。

よくあんな話をきりつと聞いていられるなと思う。けれど彼らにとっては、それが当然のことなのかもしれない。

彼らは今日、生徒になったばかりなのだから。

退屈なカマキリ女の話が続く中、私はそろそろ自分の世界に静かに身を落とす準備をしていた。

いつ話が終わってもおかしくない。カマキリ女は、そんな、取り留めのない話をしているような気がしたのだ。

だから私は、いつでもすぐに自分を発揮できるよう、事前に精神

を集中させておかなければならなかった。

なぜなら、カマキリ女のくだらない（失礼になるのか？）話がようやく終わると、「在校生からの入学祝い」と称して、私が生徒代表でピアノの演奏をすることになっていたのだった。

さらに10分ほど経って、ようやく話も終盤になってきたようだ。最後に……という単語がちらっと聞こえたので、私は研ぎ澄まされた集中力をいったん開放した。

「あまり神経を尖らせても、いい演奏はできないよ。注射器で細い穴をプスツと打つみたいなのに、頭に空気を入れてあげるんだ。それで弾くと、全然違った音になる。それはなぜか、分かる？」

それはなぜか。

細い穴には、集中力とバトンタッチで“自分”が入り込んでくる。その瞬間、音は“わたしの音”になる。わたしの、わたしのだけの。だから、「楽譜どおりに弾いても同じ曲ではないように感じる」のだ。

小学1年生のときの最初の発表会の日、舞台の袖で次に迫った出番を震えながら待っていたときに、私のピアノの先生から言われた言葉。

それ以来、私はどんなに小さい発表会でも、どんなに緊張しなくなっても、必ず集中の風船がぱんぱんになる前に、“自分”をつめるようにしている。

“日本最高の音楽学校で指導する教師と、そこに合格した生徒”の前で演奏するのは緊張していないが、私はいつものように心をふうと軽くする。

けれど、カマキリ女は最後に……と言ってから、また春を引き合いに出して話し始めた。

事前の打ち合わせでは、カマキリ女が私の紹介をして舞台袖に下がり、1拍置いてから私が出ていくはずだった。

カマキリ女の話は、リピートボタンを押しっぱなしの音楽のステレオのようだ。

それしか言葉を知らない。そして、そればかり話す。

早々と開放してしまった心に、カマキリ女の最初の言葉が染み込んでくる。

今年の春は、珍しい突風が吹き荒れることや桜の開花が例年よりも遅いことがあり、どこか違っていている。

そうなのだ。

カマキリ女と同じことを思っていると捉えると、なんだか気が重いが。

私にとっても、今年の春は違っていた。

そのひとつが、「入学式での生徒代表」だった。

先生

「 ということで、私たちは未来の音楽界を創っていく生徒を育成しているのです。新入生の皆さんも、これからの4年間を有意義に過ごし、音楽を学んでください。それでは、生徒代表の模範演奏に移ります。今年の代表は昨年、首席で入学した女生徒です。彼女は特別クラスに在籍し、毎日指導を受けて技術を磨いています。新入生のみなさんも刺激を受ける、いい演奏をしてくれます。ピアノ科特別クラス2年、浅羽望によるシヨパンの『ポロネーズ』です」

カマキリ女は30分長にも及んだ雑談に満足した様子でこっちに向かっている。

そのとき私は、とつくに準備万端だった心が少し傾きそうになっているのを、必死で抑えようとしていた。

毎日指導を受けて技術を磨いています。

私が毎日のようにサボるのを鬼の形相で連れ戻しに来るのはいい誰。

新入生のみなさんも刺激を受ける、いい演奏をしてくれます。

いい演奏を“してくれる”だって。あなたのそのカマキリ顔を立てるために弾くんじゃない。

ハラワタが煮えたぎる思いつてこういうことなんだ、と、私は身を持って体験させて“いただいた”。

舞台袖に下がったとたん、彼女のさつきまでの作り笑顔が一瞬で消え、またその一瞬で、いつものカマキリ女に戻った。

目はまぶたの上に紐を張ったように吊り上がり、口元は緩んでいたのが急に真っ赤な口紅を塗りつけたようにキツイ印象になった。

私は振り返ると、彼女の唯一変わらないぴしっとした姿勢にこっそり拍手を送った。

テレビはあまり観ないほうだからよく分からないけれど、彼女のその華麗なる変身は、まるで大物女優のオンとオフのように思えたのだった。

彼女はとても素晴らしい演技をしていた。

「お疲れさまでした。とても良いお話でした」と、取り巻いているただの教師らを見ると、さらに彼女の貫禄というものまで感じるほどだった。

そう私が思ったのは、4年間のうち、今日だけだったけれど。

とりあえずその驚きが強すぎて、ハラワタがぐつぐつに沸騰するのは免れたようだ。

ただ、彼女のせいであり、彼女のおかげでもあるのが、あまり納得いかないままになった。

私は心が完全に落ち着いたのを確認すると、きゅっと背筋を伸ばし、目を閉じる。

先生の言葉をもう一度思い出して、誰にも聞こえないほど微かな口の動きで、ゆっくりとそれをなぞる。

そうすると、目を開けたら私にはピアノしか見えなくなるのだった。

美しい旋律に、私の音が入り込む。

ピアノに向かっていている私には分からないけれど、今この演奏を聴いているすべての人は、きっと自分だけの世界に気持ちよく浸っているだろう。

それぞれが心に持つきれいな世界の中で。私の演奏にのせて。

先生はこうも教えてくれた。

「演奏しているとき、何を思って弾いている？ 自分の指が奏でる音に、何を願う？ ピアノは、自分が弾くものじゃないんだ。ひとが聴いてくれるものなんだ。だからノンちゃんには、ひとがつい耳を傾けてしまう、引き込まれてしまう、そんな演奏をしてほしい。自分の音で伝えるんだ。『これが私です』って。そうすれば、自然とひとは聴いてくれるから」

演奏が終わって、私は立ち上がり一礼した。

拍手もなにもなかった。

ただ、ある人は涙を流し、ある人は微笑み、またある人は放心状態だった。

その大半は、私の演奏をはじめて聴いた、前のほうの生徒ばかりだった。

それは、みんなが私の音を受け取ってくれたということを示してくれていた。

先生。いま私が何を思って弾いていたか、あなたがこの場にいら、分かるでしょうか。

あなたを想って弾いていました。

先生。私がこの指に何を願って、音にどんな気持ちを込めていたか、分かりますか。

私のすべて、あなたに伝えたかったのです。

でもこの演奏は、あなたがいないからできたのでしょう。
もしあなたが聴いていたら、こんな気持ち、演奏できない。

きっと、あなたなら、分かっってしまうだろうから。

第二段階

音楽学校の中庭には、意味の分からない大きな噴水がある。

その周辺にはいくつかベンチがあつて、気持ちのいい日にはそこで寝転んでいるのだけれど、午後になつて風が出てくると、すぐそばの噴水から水しぶきのシャワーが体中に降り注ぐのだ。

だから、ベンチは暑くなってくるころ、おもに7月に、私のサボり場になる。

秋冬はどうにも寒いので、仕方なく授業に出ることが多い。

それでも、耳が完全に彼らの音に犯されるギリギリのところまできてしまったら、やっぱり授業をサボる。

秋冬のサボり場は、談話室だった。

キイ、と大きな音が鳴ることと有名な談話室のドアを、私はなんのためらいもなく力いっぱい開ける。

そのうち見つかるのは分かっていたし、見つけてほしかった。

そしてまた怒られて、ひとり準備室での練習にこもる。

場所が変わることを除けば、1年なんてみんな同じ。

時が早く経つのを祈りながら、過ごすだけだった。

それはとてもつまらなかった。

“このまま”残りの音大生活が続くのだとしたら、つまらなかったらどう。

* * *

「うちの学校からは、ピアノ科代表は2年の浅羽望さんに決まりました」

と、カマキリ女が発表したのは、年が明けて初めの授業のときだった。

周囲はざわつくこともせず、私　あまりの寒さに耐え切れずここ3日ほど真面目に授業に参加している　のほうを一齐に見やっ

た。
「今日から1か月、コンクールまで、浅羽さんには個人レッスンに入ってもらいます。浅羽さんはこれから第5音楽室に行ってください。担当教師が待っています」

とたんに、生徒たちは騒ぎはじめた。

「第5音楽室の担任って、成沢先生?!　うそ?!　いいな、浅羽さん」

成沢先生。

私には誰だか分からなかった。

第5音楽室は、思ったより遠い。

その前に、もともと第1音楽室しか知らない私に、そこに行けというのは無理難題じゃないだろうか。

ようやく教室名の書かれたプレートを見つけたことができたのは、20分ほど校舎を歩き回ったあとだった。

重たいドアを開けると、中から誰かがピアノを弾く音色が聞こえてくる。

私に気づくと、男の人は手を止めた。

「やあ、だいぶ遅かったね」

「ここの場所が難しすぎたんです」

「それじゃ仕方ないか」

男の人は立ち上がり、私の前まで来た。

「聞いてると思うけど、今日から個人レッスンを担当する成沢です。浅羽さんの評判はよく聞いてるよ」

「それって、悪い評判ですか」

「どっちもだね」

そう言って笑った。

なるほど、女子たちが騒ぐのも無理はない。

この人は他の教師よりもだいぶ若い。おまけにルックスもいい。加えて、だいぶフェミニストだった。それはすぐに知ることができた。

「僕の指導は受けてもらえるのかな？」

「ああ……はい。そのつもりです」

「つもりかあ。まあ、でもよかった。君の演奏が聴けるなんて、僕は幸せ者だね。これから毎日君のかわいい顔が見れるのも、嬉しいね」

言われたこっちが恥ずかしい。

はい、とは言ったものの、やっぱり断ればよかったかもしれない。この人と毎日一緒にいなきゃいけないのか。

私はこれからの1ヶ月間に不安を覚えた。

けれど、やらなきゃいけない。

その先には必ず、私の夢がある。

コンクールに出ること。それが、この学校に入学した理由に繋がる第二段階なのだから。

個人レッスン

「そこはもう少しデクレッシェンド（だんだん強く）を強調してもいいかな」

「はい」

個人レッスンを受けるようになって2週間も経つと、成沢先生の人気がどれほどすごいものか、いくら周囲に無関心な私にでも分かる。

というか、すでに1日目のレッスンのときから、それは“気づかされた”と言ったほうが正しいかもしれない。

1日目、私が遅刻したせいで、練習時間は1時間ほどしかなかった。

すると成沢先生は言った。

「ピアノはとりあえず閉めておこう。今日はまず、お互いを理解すること。そして、コンクールでの自由曲を決めようか」

「はい」

「それじゃあ、何か僕に質問はある？」

「質問ですか」

「ピアノのことじゃなくて、僕についてのこと。歳はいくつだとか、身長は何センチかとか。彼女はいるかでもいいよ。浅羽さんの興味があることなら何でも。僕は全部答えるよ。そのかわり僕も質問する。だから君も隠さず答えること。いいね？」

「なぜですか」

「最初に言ったように、お互いを理解するためだよ。気持ちに通じ合っていないと対等に意見を言い合えないし、聞こうとは思わないだろう」

「……確かに、そうですね」

確かに、先生もそうだった。出会ったころ、同じことを言っていたし、同じことをした。

「じゃあまず、僕から質問するよ。君はどの季節が好き？」

「は？」

「いいから、答えて」

「春です」

「なぜ？」

「あつたかいから、外でサボれるじゃないですか」

「ああ、そうだね。君は春、中庭の桜の木の下で寝ていたね」

「知ってるんですか」

「見てはいないけど、宇津井先生がよく言ってたから。『またあの子は中庭にいるのね』って」

宇津井？ もしかして、カマキリ女のこと？ そう、そんな名前だったのか。どうでもいいけど。

「で、君から僕への質問は？」

「え？ えっと……」

正直、思いつかない。

他の教師たちよりは関心も持てるけれど、だからと言って知りたいことなんて特にない。

でも、「お互いを理解する」ためには必要なことだというのも分かっている。

「じゃあ、成沢先生の下の名前は」

私はとりあえず、当たり前前のところから始めることにした。

そうすればきっと、だんだん知りたいことも増えてくるだろう。

「拓巳。成沢拓巳っていうんだ」

「私はなんて呼べばいいんですか」

「先生方は『成沢先生』、生徒たちは『拓巳先生』って呼んでるのが多いかな。たまに生徒で『タクミさん』って呼ぶ子がいるんだけどさ、それはちょっと照れちゃうよね」

それはたぶん、私が成沢先生に指導を受けることが発表されたときいち早く反応した、ミーハーな女の子たちと同類の子だと思った。「何歳ですか」

「28だよ。教師の中では一番若いんだ」

「身長は」

「180センチ、ジャストだよ」

「へえ、やつぱり」

「ん？ なにが？」

「モテる要素をいっぱい兼ね揃えてるなあと思って。成沢先生、人気あるみたいだったから」

オジさん中年ばつかりの中で、長身のイケメン28歳だったら、私たちくらいの歳だったら憧れるのも頷ける。しかも相手は教師だし、夢見る女の子たちは禁断の恋っていうフレーズにもけっこう弱い。

「そうなんだ。嬉しいなあ」

「気づいてなかったんですか」

「うーん、好意を持ってくれる子が何人かはいたけど。人気があるなんて知らなかったよ」

と、成沢先生は嬉しそうに柔らかく笑った。

すると授業終了のチャイムが鳴った。

いつの間に、1時間も経っていたのだろう。人とこんなに長く話していたのは久しぶりだった。

「もう終わりか。曲も決めてないな。まあそれは君の弾きたい曲をやってもらおうと思ってたから、なにがいいか考えてみて。それじゃ、僕からの質問ね」

「まだやるんですか」

「これで最後だよ。どうしても聞きたいこと」

「何ですか」

「さっきの君からの質問に対してなんだけど……」

意外だったのは、この人がそういうことを気にする人だったこと。

「それで、僕のことはなんて呼んでくれるの？」

「ああ……」

「もう一度言うけど、先生たちは『成沢先生』、生徒たちは『拓巳先生』、僕に好意を持ってくれてる一部の女子は『タクミさん』。

じゃあ、君は？」

「そうですね……」

「あと、もうひとつ。君はそこに入ってるの？」

「その中？」

「一部の女子の中」

正直に言ってもいいだろうか。

名前も顔も今日知りました、と。

そんなこと、いくら私でもできない。

「私その中に入ってると思いますか」

結局出た言葉も、なんだか失礼な言い方になってしまった。

けれど本当のことだから、言葉や言い方にまでは、嘘のつきようがなかった。

成沢先生は考えることもせず、

「ないね」

と言った。

「君は僕に好意を持つどころか、僕のことを今日まで知らなかったようにさえ思えるよ」

当たっていた。

先生、すごい。ものの1時間で、もう私のことが分かったんですか。

「好意は持っていますよ。でもそれは、一部の女子のものとはまったく違うでしょうね」

好意を持っている、というのは、本当のことだ。

別に嫌ってもいない。どうも思っていないというのが大正解八ワイ旅行プレゼントくらいの気持ちだが、単純に人としてどうかと問われれば、こういう人は好きな部類に入る。

なんとなく、考え方が先生と似ているから。

「それじゃあ、また明日」と私は言った。

成沢先生は、さっきの私の言葉に少しがっかりした様子だった。けれどすぐに調子を戻して言った。

「明日は遅刻しないようにね。課題曲の練習にも入るつもりで、楽譜を用意しておくから。あと、もうひとつの質問の答えだけど・・・

・・・」

私はドアノブに手を掛けたところ、後ろを振り返って言った。

「明日、楽しみにしていますよ。『成沢センセイ』」

ボタン、と第5音楽室のドアを閉め、扉にもたれかかった。

きつと、今もがっかりしてるんだらうな。

そんな成沢先生の表情を、さっきの様子の何倍も落ち込んだ顔を想像してみると、なんだかおかしくなった。

明日、楽しみにしていますよ。

なんて。楽しみに思うなんて、どうかしてる。

けれど、今日の学校は、つまらなくはなかった。

アメとムチ

コンクール前日。

個人レッスン最終日。

今日も先生はあいかわらず質問してくる。

「うん、いいね。明日もこの調子でいけば、いい結果が得られると思うよ」

「はい」

「ところで浅羽さんの好きな食べ物は何？」

「は？・・・ああ、フルーツは好きです」

「そうなんだ」

と、こんなふう我突然に、訳の分からないことを言う。

それはレッスン初日からずっと続いているので、一瞬戸惑ってみるものの、さすがに私もちゃんと答えるようになった。

「それじゃあ最後に、課題曲と自由曲を通してみようか」

「はい」

私はすうつと一息呼吸して、弾き始めた。

弾きながら、個人レッスンを思い返してみる。

私はこの学校で得るものは何もないと思っていたけれど、レッスンを通して、成沢先生から学んだことはいくつもあった。

* * *

2日目に、私は成沢先生から好きに決めていいと言われた自由曲の楽譜を持っていった。

「これを自由曲で弾こうと思ってるんですけど」

そう言って楽譜を渡すと、成沢先生はそれをめくった。

「ベートーベンの『ピアノソナタ』ね……………」

「だめですか」

「いや、誰かに伝えたい想いとかがあるのかなと思って」

「……………なぜですか」

「ソナタは告別とか月光とか悲愴とか、哀愁深いものが多いよね。感情移入しやすいっていうか、魂が込めやすいっていうか。まあ、なんとなく感じただけなんだけど。それで、何番？」

「31番を」

「それはなんで？」

「特に意味はないですけど。あえていうなら、31番は弾いたことがないから」

そう言うと、成沢先生は声に出して笑った。

「ははは、君ってやっぱりおもしろいな」

「は？」

「普通コンクールとかなら、自分が弾きやすそうなものを選ぶものなんだけどね。『弾いたことがない』なんて」

先生はまだ笑っていて、私はなんだかすぐムカつときた。笑われているその意味が、私には分からなかった。

「1ヶ月もあればちゃんと弾けますよ」

買言葉のようになってしまうたが、本当に自信があった。

3日もあれば完璧に暗譜できるし、一週間あれば弾けるようになる。あとはそれに、自分の音色を加えていくだけだ。どんなに時間がかかったとしても、1カ月後には「私の曲」になっているはず。

その自信が、私にはあった。

「さすがだね。だいたいの子は『1ヶ月しかない』って言うんだけどな。じゃあ曲はピアノソナタ第31番でいいこう。とりあえず自分で練習してみて。初めのうちは課題曲から練習しよう」

成沢先生は課題曲の楽譜を私に差し出し、私がそれを受け取るうとしたとき、こう言った。

「僕はピアノに関しては甘くないから」

そしてとうとう本格的な、成沢先生と私の一対一のレッスンが始まった。

「ペースが速い。もっとひとつひとつ丁寧に弾いて」

「そこにはピアノシモが連続してあるだろう。だからもっと強く」

「はい、そこもう一回」

そんな言葉のあと。

「浅羽さんは素晴らしいね。言うことがないよ」

という、ひとこと。(いや、言ってるから。と私は思う)
毎日がその繰り返しだった。

成沢先生はとても厳しいわけではないけれど、アメの量に対してのムチが多すぎた。

けれどその言っていることは正しくて、その通りに弾くと、格段に良くなっているのが分かった。

成沢先生からは、かなりいいものを得たかもしれない。

そして今日で、レッスンが終わる。

1ヶ月間を振り返りながら、私は成沢先生への感謝を込めて弾いた。

“ありがとうございました”を、音にして伝えた。

私の想いは、届いたでしょうか。

課題曲と自由曲を通して弾き終わると、成沢先生は言った。

「拍手は明日にとっておこう」と。

コンクール前日。
個人レッスン最終日。

成沢先生は“ありがとう”のお返しに、今まで足りなかった分の
アメをくれた。

桜の出会い（前書き）

今回と次回で物語のキーポイントが2つ、出てきます！！
お楽しみに。

詳しくはあとがきの方に書きましたので、よろしければそちらもぜひ
どうぞ。

桜の出会い

3年生になった。

そして今、私は講堂の舞台裏にいて、カマキリ女のくだらない話を20分ほど我慢して聞いている。

正しくは“聞いているふりをして集中している”。

「それでは生徒による模範演奏に移ります。昨年、みなさんより1つ年上の新入生の前で演奏し、3月の全国コンクールで最優秀金賞を受賞した生徒です。ピアノ科特別クラス3年浅羽望による、ベートーベンの『ピアノソナタ第31番』です」

去年よりカマキリ女の話が少しだけ短いのは、今年の桜が例年通りに咲いたからだろう。

私はまた生徒代表に選ばれ、コンクールでの自由曲を演奏するよ
うに、と言われた。

新入生たちへの、学校のアピールのためにそうしたのだということ
とは分かっていて。

それでも私は言とおりに弾いた。

これで、2回目。

来年も生徒代表に選ばれれば、3回目。

そうしたら、私で決まりだ。

* * *

中庭の桜の木の下に寝転んで、サボる季節がやって来た。

一番好きなサボリ方だ。

寝転んだ芝生はとても温かい。よく中庭で見かける用務員のおじさんが大切に育てた芝生が、私の背中をちくちく刺すのを堪えれば、そこにいるのはとても気持ちよかった。

そしてそのうちにまたカマキリ女が迎えに来て、私は惜しみながらも明日を楽しみにその場を去る。次の日もまた同じ繰り返し。

気がつくと、噴水のそばに駆け寄ってしまう季節がやって来る。

「浅羽さん」

芝生に思いきり寝転ぶ寸前、成沢先生が校舎の廊下から叫んだ。

「そこ、気持ちいい？」

私は少し離れたその場所に、聞こえるように言った。

「はい」

成沢先生は私の返事に満足したようで、にこっと笑うと手を振りながら歩いていった。

コンクールが無事に終わり、春休みをはさんで、この春からはまたお互いいつも通りの授業に戻ったのだ。

個人レッスンの面影もなく、第5音楽室はこの時間、ピアノ科2年の授業になった。

特別クラスの教師が成沢先生だったら、私は授業に出ていたかもしれないのに、と、あれから何度か思った。

成沢先生なら、あそこでの私の位置を、はっきり分かってくれていただろう。1人だけ、飛び抜けてしまっていることに。

けれど、なぜか特別クラスは教師が変わらない。よく覚えてはいないけど、毎年生徒たちには変化があるようだった。それは、毎年の成績によって決められているらしい。

私は芝生に寝転んで、目を閉じた。鳥の鳴き声と、爽やかに吹く風の音があった。噴水の音が止み、一瞬“ここ”は静寂に包まれた。そのあと、風が吹いて桜を揺らした。花びらが1枚、頬に落ちて

くるのを感じると、まもなくそれは現実になった。

向かってくる足音が聞こえる。いつもより少し早い、カマキリ女の登場。

それでも気づかないふりをして、目を閉じていた。

足音は次第にはつきりと、地面にこすれる靴の音がする。

けれど、それはいつもと違っていた。

カマキリ女の足音は、それだけで怒りを表している。

けれど、今日のそれは違う。この足音は、とても軽やかだ。さすが音楽学校といったような、リズムカルな音色。

すぐく近くに誰かの気配を感じると、音がピタッと止まった。

「浅羽さん」

私を呼ぶその声は、男の人だった。

桜の出会い（後書き）

どうでしたでしょうか？

キーポイントとなるひとつめは、「私で決まり」という言葉です。

この意味はもう少しあとで描くことになります。

そしてもうひとつが、「私を呼んだ男の人」です。

これは次回に続いているので、彼の正体は第20話にて。

それでは今後ともよろしくお願いします。

よろしければ評価していただけたら、これからの励みになります。

いたずら

ゆるく傾斜がかった芝生の丘に寝転んだまま、ゆっくりと目を開けると、目の前には男の子が立っていた。

柔らかい笑顔の後ろには、桜が咲いていた。

まるでそれは、彼のものであるかのように。

「似合っている」という言葉だけでは足りないくらいに、きれいに咲いていた。

桜の精霊みたい、と思った。同時に私の心の中では、彼を表す音色がいくつも弾かれていた。

タイトルは「春の使者」。

そんなふうには勝手にイメージを膨らませている間、私はずっと彼に見惚れていた。

「浅羽望さん。いつもここにいますか？」

そんな彼の言葉によって現実に戻されてしまい、私は少し不機嫌になった。

「……だれ？」

そう聞くと、彼はにっこりと笑って

「新生です」

とだけ言った。

なぜ、名前も知らない男の子が、私の隣で気持ちよさそうに寝転んでいるのだろう。

目を閉じて思いきり太陽を浴びている彼を、私は横目で盗み見た。

すると、顔ごとこっちに向けた彼と目が合った。

「気持ちいいですね、こっち」

彼はそう言つて、「んん〜」と声を上げながら伸びをした。

「いいとこ知つちやったな。俺もこれからはここでサボろつと」

と、いたずらな少年のようにニカツと歯を出して笑つた。

「新入生がサボるなんて、なに考えてるの」

と私は言つた。

「浅羽さんだつて、1年のときからサボつてたつて先生から聞きましたよ」

どうせあのカマキリ女でしょう、と小さく舌打ちをした。

あの人は、本当にくだらないことばかり言つている。全校の前では褒めておいて、直後に新入生にそんなことをネチネチ言うなんてバカらしくてしょうがない。

私は1年前に感じた“ハラワタが煮えたぎる思い”を、再びカマキリ女によつて取り戻させていただいた。

「私のは理由があるからいいの」

私は心の中にあるお湯が沸騰しているのを、素早く火を消して落ち着きを取り戻した。

けれど、冷ます時間がなかった。

言葉に少しの怒りが生じていたようで、彼はそれ何も以上言わなかった。

お湯が、完全に冷めたころ。

「浅羽さん！第1音楽室に戻りなさい」

と、カマキリ女が湧いて出てきた。

お湯が冷めてなかったら。少しでも熱を持っていたら。

彼女に皮肉の言葉でもかけてあげるのに。

私がうつとおしそうにのろのろと立ち上がると、カマキリ女の前には背後にいた彼の姿が映つた。

「あら？ あなたは確かピアノ科1年の……」
カマキリ女の手を遮って、彼はすくっと立ち上がった。

「はい。偶然廊下から浅羽さんを見つけたんで、押しかけちゃいました」

そう言っつて、その場で怒りを露わにしているカマキリ女を「はいはい、授業のあとで聞きますから。早く行かないと授業の時間なくなっちゃいますよ」となだめて、うまく教室へと誘導していった。彼がカマキリ女の背中をグイグイ押し行つて、私はゆっくりとそのあとに続いた。

校舎に入ると、2人は第3音楽室のほうへと向かい、私はひとり、反対にある第1音楽室へと足を向けた。

「浅羽さん」

振り向くと、彼はカマキリ女だけを教室に押し込めていた。

「浅羽さん、またね。俺のこと、覚えておいて。俺の名前は、」
彼は最後に声を消して、私に口の動きだけを伝えた。

私は彼の口元を真似して、声に出した。

「じ」

「う」

洗。

彼はまた、あのいたずらな少年の笑顔をしてみせた。

そのときは、その笑顔の意味を私は知る由もなく。

いや、そこに意味はなかったとしても。

彼はのちに、私にいたずらをひとつ、残していく。

それに私がようやく気づくのは、5年もあとのことだったりする。

抱きしめる(前書き)

しばらく過去の話が続きましたが、今回からまた現在に戻ります。
第12話「観念」の続きになります。

抱きしめる

何年もの眠りから覚めたような、不思議な満足感を抱いていた。外はまだ薄暗くて、時計を見ると、5時間ほどしか眠っていない。なのに、心も体も、まるでまだ夢の中のふわふわした世界にいるみたいに、軽かった。

起き上がって薄いレースのカーテンを弛たるませると、遠くの方で太陽が起き上がろうとしている姿が見えた。

おいしいコーヒーを出してくれると評判の喫茶店の主人が、注文されてから豆をミルにかけてじっくりと挽くみたいに。

私がカーテンを開けるのを待ちわびていた太陽は、その丸いボディをゆっくりと空に広げていった。

“夜明けの儀式”をぼーっと眺めたあと、陽に映し出された私は、自分が裸同然の格好でそこに立っていたのに気づいた。はっとしてベッドを振り返ると。

そこに、岬さんの姿はなかった。

ベッドの脇に脱ぎ捨てられた柔らかいフリースの上下を拾い上げて、またそれを着た。

そして再びベッドにもぐり込むと、岬さんの纏っていた香りがした。

それはヒマワリの油を少しだけ含んだ、男の人のにおいだった。

ヒマワリの心地よい束縛に包まれながら、私は布団の中でうずくまっていた。

こうしていると、まだ幼かったころの自分を思い出す。

あのころ私はいつもうずくまって、そのうち自然と眠るようになるのを、じつと待っていた。

今みたいに、誰かの香りに包まれることもなく。さっきまでのように、誰かが側で抱いていてくれることもなく。

眠りにつくまでのあいだ、布団の中に孤独を招いていた。

何百匹にもなった羊たちは、孤独を埋めてはくれずに。

頭の中でメエメエとうるさく叫び続けては、いつからか、私の眠りを阻止する敵にまでなっていた。

しばらくの眠りのあと、私はベッドから起き上がり、寢室を出た。岬さんの残り香は、はじめからなにもなかったように消えてしまっていた。

10時だった。すっかり太陽は熱を帯びていて、まだ午前中だというのに、とても暑い。

ピアノの上には、6度目のヒマワリと小さなメモが置いてあった。

「今、4時です。もうすぐ外は明るくなってきます。そのまえに僕は帰ります。気づきましたか？ ヒマワリがまた新しくなっているのを。次もまたヒマワリです。8月も半ばに入って、もう真夏日といってもいいくらいですね。だから、やっぱりヒマワリです。それでは、また。」 岬

それは、とても丁寧な字で書かれていた。

もう一度ヒマワリに目をやると、みずみずしくて、きれいすぎて、その姿も香りも、昨夜、全身で私を包んでくれた、岬さんそのものを表しているようだった。

* * *

「私は……」

姉が帰ったあとの、岬さんの追及。

もう隠してはいられない、と、ついに観念した私は、頭の中を駆け巡っていく過去の記憶を掴まえて、彼にすべてを話そうと、そう思った。

けれど、急に、分からなくなった。

なにを話せばいい？

なにを話さなければいけない？

というよりも、このひとはなんの関係もないじゃない。

そして私は、そのあとに続く言葉を迷って、結局やめた。

途中で言いかけたままの口は、それから動くこともなく、ゆっくりと閉じられた。

岬さんは、無理に聞こうとしなかった。

そのかわりに、有無を言わさないような強い力で、私を強く抱きしめた。

そのあとは、そうすることが自然だったかのように、2人は抱き

合ったのだ。

岬さんは初めて私の寝室に入った。
私は初めて、男のひとに抱かれた。

2人ともなんのためらいもなく。
そうすることが運命だったと思えるくらいに。

お互いの息づかいしか聞こえない空間の中で、同じ時間を、初めて共有したのだった。

真夏日

岬さんの腕の中で、私は言った。

「なにも聞かないんですか」

彼は両腕で私の頭を抱え込んだ。痛いですよ、と言っても、その力は緩まなかった。

「本当は、すごく聞きたいです。あなたの過去になにがあったのか。どうして閉じこもるようになったのか。なぜピアノを弾かなくなったのか。でも、気づいていないでしょう？ ノンさん、あまりに辛そうな顔をしていたんですよ。まるで、死の直前みたいなの。だから、なにも聞けなかった」

そして岬さんは腕の力を緩め、すいません、と言った。

死の直前。

そうかもしれない。

むしろ、死なんかよりも、もっと怖い。

あの絶望は、死では償うことなどできない。

永遠に、逃れることさえできない。

たとえ、私が死んだとしても。

次に岬さんが私の部屋を訪れたのは、2週間も過ぎたころだった。あの日、今日から本格的な真夏日になる、とテレビも岬さんと同じことを言った。

そしてそれは見事に当たり、毎日のようにクーラーを付けなければいけなくなった。

その甲斐あってピアノの音が狂うことは一度もないが、冷氣にはかり当てられたあのみずみずしいヒマワリと私は、「元気」という気を、完全に失いつつあった。

岬さんは開口一番にこう言った。

「久しぶりです。あの……こないだは勝手に帰ってすいませんでした」

あえて目を合わさないようにしているのだろうか。

岬さんはとても照れた様子だった。

「いいえ。それより、ヒマワリが」

「ああ、やっぱり枯れちゃったかあ」

と、花瓶を持って、キッチンへ行った。そして、予告どおりの7度目のヒマワリを花瓶に挿した。

「ヒマワリって、意外と難しいんですね」

と私が言つて、岬さんは「何がですか?」と聞く。

「暑さでも枯れるし、寒くても枯れるし」

すると岬さんは私がクーラーのことを指しているのだと気づいて、「ああ、そうですね。クーラーの風って、やっぱり自然に吹くものとは違うからでしょうか」

と言った。

いつもの場所に7度目のヒマワリを置くと、岬さんはピアノの椅子に座った。

「なんか、ノンさんみたいですよね」

「何がですか」

「ヒマワリです」

「それ、前にも言っていましたっば」

私はそのときの言葉を思い出す。そして、依然消えないあの疑問をもう一度投げかけた。

抱き合った今なら、岬さんは答えてくれるだろう、と思った。

「私のどこがヒマワリなんですか」

そして岬さんは答えた。

「ノンさん、自分で言ったじゃないですか。ヒマワリは難しい花なのかって。それですよ。ノンさんも同じ。どうすればうまく育てられるのかが分からない。だけど、あなた自身はそれを誰かに教えてくれようとしなない。僕はそれが、ヒマワリのようにだって言ってるんですよ」

私は押し黙ったまま岬さんの方を向いていた。

このまま黙っていれば、岬さんはまた諦めてくれる。

ずるいけれど、そう思っていた。

それが、まさかこんな形で崩れてしまうとは、どうやって予想できただろうか。

岬さんが諦めの表情を浮かべ、口を開きかけた瞬間。

玄関には、あのひとが立っていた。

あのひとの音(前書き)

ついに「あのひと」が登場です!!
これからどろどろ出てくるのでお楽しみに。

あのひとの音

ガチャ。

という音に反応して玄関を見やると。
そこには、あのひとが立っていた。

「ノンちゃん。あ、ごめん来客中？」

彼は岬さんを見つけると、ぺこつと頭を下げた。それにつられて岬さんも、「あつどうも」と慌てて頭を下げる。

「じゃあまたあとで来るよ。すいませんでした。お取り込み中に」と言つて玄関を去ろうとした彼に、岬さんは言った。

「あついや、僕も今帰りますから。どうぞ」

「いやいや、大丈夫ですよ」

「いいえ、本当に……」

2人はそんなやりとりを繰り返して、結局どつちも譲っていたら、2人とも帰るということになってしまった。

私はさつきからうるさく脈打っている胸の音を鎮め、必死な2人に見つからないように、ふうつと深呼吸した。

「陽路^{ひろ}くん、帰らなくていい。岬さんもいてください」

私は2人の間に割って入った。

2人ともきよんとして、「それじゃあ」と言つて部屋に入った。

中立の位置にいた私は、2人をそれぞれ紹介した。

「岬潤さん。いつも花を持ってきてくれるの。お姉ちゃんから聞いてるでしょ？」

岬さんはまた頭を下げて、今度は彼がそれにつられた。

「それで岬さん。この人は、^{あまみやひろ}天宮陽路さんです」

2人の軽い挨拶が済んだところで、私は彼に言った。

「陽路くん、どうしたの？」

「あ、いや、その……叶が、ノンちゃんに嫌われたって落ち込んでたから、何かあったのか気になって」

「ああ……」

そう。姉は、あれきり家に来なくなった。

岬さんが2週間ぶりに来たのだから、姉もすでに2週間来ていないということになる。

あのとぎ。

「何もわかってない」と言った私の言葉、声、表情で、姉は感じ取ってしまったようだった。

ひとりで抱え込んでいた、私の想いに。

そしてこのひとは、そんな姉を心配してやって来たのだという。

私は彼にかける言葉を探していた。

本当のことなんて言えやしない。

それを言ってしまったら、とうとう絶望に堕ちてしまうのは、分かっていたから。

けれど、私の中の暗い部分が、言葉を見つけようとするのを邪魔している。

これ以上、このひとは私をどうしようというの。

こんなときにまで、このひとは姉のことだけしか見ていない。

私はぐっと目を閉じて、またすぐ開いた。

暗くてどろどろした感情を振り払うように。

そして彼の目をまっすぐ見て言った。

「陽路くん、お姉ちゃんに言っておいて。』ごめん。あのときは暑くていららしてたの。それをお姉ちゃんに八つ当たりしてしまっただけ。またいつでも来て』って」

彼はその言葉に、分かったよ、と納得の笑顔を見せた。

「じゃあ、僕はこれで失礼します。ごめんねノンちゃん。岬さんも」

「お姉ちゃんによろしく」

「うん、またね」

ドアが閉じられて、鉄筋の音が鳴る。

この音は、前にも一度だけ聞いたことがある。

予期せぬときに、姉と、2人で来たとき。

そのときも、こんなふうに優しい音で、鳴っていた。

「ノンさん」

はっとして、岬さんの存在に気づく。

「すみませんでした。あのひとつも急だから」

「天宮さんって、お姉さんの？」

「ああ、婚約者なんですよ。今は一緒に住んでるみたいで、もうすぐ結婚もするみたいですけど」

私はわざと明るく声を作った。

悟られてはいけない、と思った。

けれど、思ったよりも私の演技は下手くそで、声は明るかったが、瞳には涙が溢れていた。

岬さんには、やはり気づかれていた。

「じゃあ、ノンさんにとって天宮さんは？」

そのあまりに確信めいた言葉は、弱りきっていた心に突き刺さるには充分の鋭さを持っていた。

なぜさっきあのひとに言ったように、うその言葉が言えないのだらう。

言葉を探すこともせず。

「幼なじみで、お兄さんみたいで」と言ったあと、私はもうひとこと、付け加えた。

「あのひとは、私のすべてです」

頬にはついに涙が零れ落ちていた。同時に、ヒマワリの香りが私をふんわりと包むのが分かった。

まるでピアノの上のヒマワリに見つからないように。

岬さんは、私を抱きしめた。

心の声

朝、目が覚めたとき、岬さんは隣に眠っていた。

私はそつと起き上がり、柔らかいフリースを着た。

半そでに短パンだつていうのに、素材のせいか、とても暑い。

夏の暑さにはもう慣れたけれど、ちつとも涼しくなる気配がない毎日には少し嫌気が差す。

シャワーを軽く浴びてから、今度は綿100%のキャミソールとシヨートパンツに履き替える。

涼しいとは感じないが、気分は爽快だった。

気持ちよくバスルームを出ると、岬さんが起きていた。

「うわっ、ノンさん、なんて格好してるんですか!!」

と慌てて目を逸らした。

「暑いから着替えたんです。言つとくけど、下着じゃないですよ」

「下着みたいなもんじゃないですか。仮にも男の前でそんな格好してちゃダメですよ」

「何を今さら……」

そう私が言つと、岬さんは本当に、今さら顔を真っ赤にして照れた。

そんな姿は、なんだか年下っぽかった。

私は一息ついて、岬さんに言った。

「昨日のあの言葉は、岬さんの胸の中に閉まっておいってください」
彼は一瞬口を開きかけたあと、自分自身によってそれをためらった。

けれど唇をぐつと噛んで、とうとうそれを言葉にした。

「あなたのすべてつて、言っていましたよね。それは、どういふことですか？」

今度は私が開きかけた口を噤んだ。

頭で考えた言葉を言つつもりが、心がそれを押さえつけようとし

ていたのだ。

そしてついに、

「べつに深い意味はないですけど」

という逃げの言葉のかわりに、

「彼は私の幼なじみで、ピアノの先生だったんです。私にはピアノがすべてだから、それを与えてくれた彼もまた私のすべてだって、そういう意味です」

という、ほんとうの言葉を言っていた。

岬さんはそれ以上何も言わなかった。

私は、初めて主張してきた心の声に、驚いていた。

これが“本心”ってやつだろうか。

そう思って胸に手を当ててみると、心がドクン、ドクンと脈打っているのが分かった。

治まらない胸の高鳴り。

まるで、まだ言い足りない、と言っているみたいだった。

決して岬さんに聞こえてしまわないように、私は両手で胸を強く押した。

これ以上何か聞かれたら、心が何を言ってしまうか分からない。

けれど、動き出した心はこれきり静まることなく。

私の過去は、私自身によって暴かれていくことになる。

まずは、このとき偶然にも玄関のドアを開けていた、2週間ぶりの姉の訪問をきっかけに。

姉妹

「おはよう」

と、少し気まずそうに入ってきた姉は、ほとんど下着姿の私と上半身裸でベッドにいた岬さんを見つけるやいなや、さらに気まずい雰囲気を出した。

「ごめんっ、またあとで来るからっ」

と慌てて出ていこうとして、玄関横のシューズボックスに足を豪快にぶつけた。

「いった〜い」

と大声で叫んで、その場に残したはずの気まずさを自分で取り払った。

「ちよつと、大丈夫？ なにしてんの」

「だって……」

姉は足の小指を角にぶつけてしまったらしく、ひとりで立ち上がれない様子だった。

そんな姉を、素早く服を着た岬さんがソファまで抱き上げて運んだ。

姉は顔を真っ赤にして「ごめんなさい」と岬さんに何度も謝った。

どうやら、さっき見た上半身裸の姿を思い出してしまったらしい。

「ごめんね、邪魔しちゃって」

「別に邪魔じゃないけど」

「だって、せつかく2人でいたのに。やっぱりまたあとで来るね」

と言って姉はすくっと立ち上がった。

「お姉ちゃん」

私はキッチンから姉に向かって言った。

「いいから」

すると姉は黙ったまま、ストン、と腰を下ろした。

少しだけまた気まずさが漂ったのを、今度は私が払う。

「まったく、お姉ちゃんといひ陽路くんといひ、気を使いすぎなんだよ」

ふつつとため息をついて言う。

すると姉は明るさを取り戻して、

「あつ、そうなの。ヒロもね、こないだここに来たら岬さんがいて、2人で譲り合っちゃったって言ったの」

「そうそう。最後には2人も帰るってことになってさ。私は『はあ?』って感じだったんだよ。そういえば、岬さんも気を使う人ですよね」

と言って岬さんを見ると、彼は突然振られた自分の話題に戸惑い「えっ、あつ、そうですか?」と慌てて返した。

「そうですね。若いのにそんなに気を使っただけりいて、疲れますよ」

「えっ岬さんって何歳なんですか?」

「あつ22歳です」

「えっ、えっ?! 22って、望より2歳下?! 私となんて、5歳も離れてる」

「あたしも最近知った。しかも社長だし」

「社長? えっ社長?! 岬さんって何者なんですか?」

姉がそう聞くと、岬さんは答えた。

「いえ、親の跡を継いだけなんです。両親が病気がちになってしまつて、とても経営していける力がなかつたんで、僕が」

そうだったんだ。

そういえば、以前岬さんに同じ質問をしたことがある。

そのとき彼は「いたって普通の男」だと言っていたのに。

もしかしたら岬さんも、とんでもないものを隠しているのかもしれない。

「久しぶりだね」

と私が言つと、姉は精一杯の明るさで言った。

「ごめんね、しばらく来れなくて」

「こつちこそ、ごめん。陽路くんに聞いた？」

「うん。『ノンちゃんのこと守つてあげられるのは叶だけなんだから』って、怒られた」

叶だけ、か……………。

「そつだよ。お姉ちゃんがいなきゃあたし生きていけないんだから」
「望……………本当にそう思つてくれてるの？」

「当たり前でしょ。こないだ沖縄に行つて来なかつたときも、食料なくて困つてたんだよ。そのときは岬さんをお願いしたんだけど、姉は一瞬キョトンとして、すぐにその意味を理解すると、「も」と言つて怒り出した。

「じゃあまた来るね。いつぱい買い物してくるから」
と姉は笑つて言った。

何も買い物をしてしないで来たところを見ると、今日は“仲直り”だけを考えてきたらしい。

「よろしく」

「うん。ヒロも連れて一緒に来るね」

「だから、忙しいでしょ。いいよ」

「ううん、2人で望に報告したいことがあるから」

「……………あ、そう。分かった」

「じゃあね。岬さんも、また」

ボタン。　カンカンカンカン……。

閉められた扉の音も、ヒールが鳴らす鉄筋の音色も、やけに耳に響いてくる。

岬さんは、黙ったまま玄関に立っている私の背に向かって言った。

「ノンさん、今はあなたの本心ですか？」

私はその言葉を理解するまで、一拍あつた。

振り返って、岬さんをまっすぐに見る。

「……どうのことですか？」

軽く睨むようにして、私は彼の目を見続けた。けれどそれに臆することはなく、岬さんは言った。

「『お姉ちゃんがいないと生きていけない』って、本当に思ってますか？」

なぜ。

だから、なぜ、このひとには分かってしまう。

私にだって分からない、この心の中が。

「岬さん」

彼の名前を呼んだとき、心が、ものすごく強い力で叫んだ。

私を出して。このひとに、この孤独を伝えて。

この心の叫び、私も逃げることを諦めて、受け入れよう。

「姉と私は、本当の姉妹じゃないんです」

岬さんは驚くことでもせず、黙ったまま、私の次の言葉を待っていた。

「施設からの……」

心が、解き放たれる。

「もらわれっ子なんです」

たからもの(前書き)

今回からまた回想になります

たからもの

心が、解き放たれる。

「施設からの、もらわれっ子なんです。姉は」

* * *

姉が来た日のことは、よく覚えている。

私は小学3年生で、3つ上の姉は小学6年生。

「今日から望のおねえちゃんになる、叶ちゃんよ」

と紹介された姉は、今日から親になった両親にもまだ懐いているはずがなくて、家に入るときも相当ためらっていた。

こんなときは大人よりも、子供同士のほうが理解し合えるものだった。

「よろしくね、お姉ちゃん」

と私が言つと、姉はびくびくしていた仮面を脱いで、にっこりと笑った。

いったん私を「妹」だと認識してからは、義理の両親を「親」だと思つのも簡単だったようで、姉はすぐ「お父さん、お母さん」と呼ぶようになった。

私はそのときのことを、鮮明に覚えている。

日にちや時間、姉の着ていた服の色まで、何もかも覚えている。

なぜなら、それまで私を溺愛していたはずの両親が、姉を連れてきたとたん、血がつながっていない、いわば「赤の他人」の姉を、

溺愛するようになったから。

姉は迷惑をかけないように、自分を引き取ってくれた両親のために、必死に“いい子”になった。

勉強は学年トップ。スポーツはあまり得意ではなかったけれど、そのかわりに生徒会長などに進んで立候補していた。

そんな姉が、両親は愛しかった。

姉は両親のために頑張ったけれど、じゃあ、快く“妹”になった私のために、何をしてくれたのだろう。

姉が私のためにしてくれたことといえば、“自慢の姉になること”だったんだと思う。

けれど、そんなものいらなかった。

私のために何かをしてくれるというなら、“出来の悪い姉”になつてくれたら。

そしたら、お姉ちゃんのこと、大好きになるのに。

そんな澁んだ感情を、私は小学4年生になるころにはすでに持て余していて、それを発散するのが、ピアノだった。

そのころ私にはピアノしかなくて、同じようにピアノにも、私しかいなかった。

* * *

私には生まれたときから「自分の部屋」というものがあって、初めてそこが「自分のもの」だと分かったのは、3歳のときだった。

「ここが望の部屋よ」

と母に連れられたのは、幼い私には大きすぎる12帖の部屋だった。

だからといって、まだ3歳の私にはそこでひとり過ごすこともできずに、いつだって両親の部屋にいたものだったけれど、寝るときだけはそこへ行っていたのだった。

豆電球の明かりだけでストンと眠りに落ちることができたのは、その部屋が「自分のもの」だという安心感があったからなのかもしれない。

その部屋にグランドピアノがやって来たのは、それからすぐのことだった。

「ピアノが弾きたい」

と私が言ったのは、その2日前のこと。

隣の家から聞こえてくるきれいな音色に私は心を奪われ、とうとう自分もやりたいと思うほどになったのだ。

その隣の家は音楽一家だった。

おじさんは調律師で、おばさんはバイオリニスト。2人ともその業界では有名な人たちだったらしい。

そして、そのひとり息子の陽路くんが、ピアノを習っていた。

私たちは家族ぐるみで仲が良く、陽路くんの両親が仕事で忙しいときなんかは家で一緒に遊んでいたのだった。

その逆に、私が陽路くんの家に遊びに行くこともあって、そのとき彼はよく、ピアノを弾いていた。

「ひろくん、ピアノすき？」

「うん。これはぼくのたからものなんだ」

「のぞみもやりたいな」

「ノンちゃんがピアノをかったら、ぼくがおしえてあげようか」

「ほんと?」

「うん、ほんと」

「やくそくね」

「うん、やくそくだよ」

と言って交わしたゆびきりげんまんを、私はさっそくその日に実行したのだった。

私の部屋に置かれたグランドピアノは、陽路くんの使っていたものだ。

私がピアノが欲しい、と言ったのを受けて、両親は初めてのおねだりに、嬉しそうに隣の家に行った。

「望にピアノを買ってあげたいんですけど、どんなのがいいのかしら?」

するとおじさんが言った。

「陽路のおさがりで良かったら、もらってくれないかな。うちにも新しいピアノが来るんだけど、それは望ちゃんには大きすぎるから」

そうして陽路くんのものは、私のものになった。

私がすごくはしゃいでいたのは、念願のピアノを手にしたことの喜びではなかった。

それが、2人のたからものになったからだった。

2人の、2人だけの。

憎しみ（前書き）

タイトル通り、少し暗い話になっています。
避けては通れない、ということまで

憎しみ

5歳年上の陽路くんは、私がピアノの先生に招いたとき、小学3年生だった。

彼はそのころの私くらいの歳にはすでにピアノの教室に通っていた。

そして教室で自分が習ってきたものすべて、私に与えてくれた。時には、彼自身のピアノへの考え方なんかも教えてくれた。

私の部屋にピアノが来た日。

「ノンちゃん、このピアノになまえをつけてあげよう」「なまえ?」

「うん。なまえでよんであげたほうが、ピアノもうれしいよ」

「ひろくんはなんてよんだの?」「ないんだよ。ぼくだけのなまえがあるんだ。だからノンちゃんも、じぶんだけのなまえをつけてあげて」

「うん、わかった」

私はピアノの下にもぐりこんで、ちょうどお腹あたりの木の板のところ、「ひろ」と黒のマジックで名前を書いた。

それは漢字が書けなかったのではなく、陽路くんとは違った存在にしたい、と思う気持ちから、平仮名で書いたのだ。

思えばそれは、未来への予言でもあったのかもしれない。

たとえ陽路くんが私から離れていっても、「ひろ」だけは永遠に私のそばにいるように。

姉が来た日、私はピアノを弾いてみせた。

ジュニアコンクールなどで賞をいくつかもらったことのある私は、得意げにそれを弾いた。

姉はとても喜んでいて、私もそれが嬉しかった。

嬉しくて、やってはいけないことを、やってしまった。

「わたしのピアノの先生はね、となりのおうちに住んでるの。あっほら、あれが陽路くんだよ」

と言つて部屋の窓から、ちょうど家に帰ってきたばかりの陽路くんを呼んだのだ。

それがまさか、2人の恋に落ちる瞬間だとは、当然知る由もなく。

私はただ、喜んでもらったことが嬉しくて、ピアノを教えてください。た彼を自慢したかったただだったのに。

時が経つても、相変わらず姉は“いい子”だった。

私は、“何でもなかった”。

人より劣ってなんかいない。勉強だってスポーツだって、出来はいいほうだった。

だけど、姉にはなにもかも、敵わなかった。

こんなことを言われたことがある。

それは、姉が初めて親戚と顔を合わせたとき、
「へえ、叶ちゃんていうの。下の子が望だっけ？」 『叶』と『望
む』なんて、素敵ね」

“望みを叶える”

そう、私はいつも望んでばかりで、だけど叶えるのはいつも姉な
のだ。

私の望むものすべて、姉に盗られてしまう。
私たちにぴったりの名前。

4人家族になってから。

旅行が増えた。

家族愛が増えた。

一家だんらんが増えた。

私を呼ぶ両親の声が減った。

私への愛情が減った。

私の笑顔が減った。

そして、憎しみが増えた。

嫉妬と憧れは紙一重だ。

羨ましい気持ちはどちらにでも変化する。

けれど、私の中に生まれた気持ちは、決してきれいで純粹な羨望
なんかじゃなかった。

「どうしてお姉ちゃんなの」

「血がつながっているのは私なのに」

「お姉ちゃんなんか、本当の娘じゃないのに」

「私だって頑張ってるのに、ちっとも見えてくれない」

「なんで、あそこにいるのは私じゃないの」

こみ上げてくる気持ちをなんとか押さえ込みながら姉を見ると、彼女は私の視線に気づいて、笑顔で手を振ってくる。

その瞬間、心の中には汚い思いが溢れて、もう、止められない。

「お姉ちゃんなんか、いなくなればいいのに」

か？」

私はピアノの椅子に座り、鍵盤の扉を開いた。クリーム色の鍵盤を左から流れるようになぞっていくと、それはとてもきれいな音を奏でた。

「言ったでしょう？」 『あのところ私にはピアノしかなかった。同じようにピアノにも、私しかなかった』」

いつからか部屋にいる時間が長くなってから、ピアノを弾くことが多くなった。

ピアノが来てから完全防音になったあの部屋にいと、私は時間を忘れていつまでもピアノを弾いていた。

そのときだけが、幸せな時間だった。

両親と姉が楽しく笑いながら話す声も、姉への褒め言葉も、何もかも、この部屋では聞こえなかった。

汚い心を表す不快な音さえ、ピアノに消してもらうことができた。誰も聴いていないから、どんなに最低な演奏だってできた。

そしてそれができたのは、ピアノだけだった。

ピアノだけが私を分かってくれた。

ピアノだけが私の友達だった。

そのうち親友になって、とうとう「わたし」になった。

「岬さん。私、お姉ちゃんを恨んでなんかいません。憎しみも嫌悪も抱いていたけど、恨みを募らせていたわけじゃない。だって、私がこうして家に閉じこもるようになってから、私にはお姉ちゃんしかいなかった。本当に、そう思っていたんです。同じように、家族も環境も、恨んでいません。私は、憎いとか嫌いだとか、そう思うことしかできなかつた自分自身を恨んでいるんです。だから、私は人生を諦めるしかなかった」

岬さんは少し黙ったあと、言った。

「あなたが家に閉じこもるようになったのは、それが理由ですか？
自分の人生を諦めたから？」

「納得できませんか？」

「あなたは天宮さんのことが好きだった。でも天宮さんは、お姉さんを好きになつてしまった。それは何の関係もないんですか？」

「どうでしょうね」

「ノンさん、なんであなたはこんなときまで……」

「岬さん」

私は彼の言葉を遮った。そのあとに続く言葉を私はなんとなく予感していて、それを聞きたくなかったのかもしれない。

岬さんの、確信を突いた追及を。

「少し疲れました。今日はもう……」

岬さんはしばらく私を見ていたが、目を合わせようとしないうちに呆れてしまったのか、黙つたまま靴を履いて、玄関を出た。

弱々しい鉄筋の音が、微かに音を弾く。

それに合わせて鍵盤を叩いても、音が出ない。

ピアノは「わたし」だから、私と同じなのだ。

“もう、疲れてしまった”

夏の終わり（前書き）

今回はこれからの物語へのプロローグみたいな感じになっています。第5話の「演奏」とつながってる部分があるので、初めに第5話の最後を読んでから見てもらつと分かりやすいかもしれません。

夏の終わり

その日の晩、体がどつと疲れを抱いているのを確かに感じているのに、ちつとも眠ることができなかつた。

何度か意識が消えていつても、夢の中で過去に弄ばれて、結局目を覚ました。

次の日にとつと精神が疲れきって、死んだように眠った。

そして、夢を見た。

夢の中で、私は誰かと笑っていた。“誰か”の顔は見えない。けれどそのひとの隣で、私は笑っていた。

それは、姉かもしれないし陽路くんかもしれないし、岬さんかもしれない。

もしくはそれ以外の……。

何もかもをひとりで抱えてきた私が、初めて誰かと心から楽しく笑っていた。

そんな、まだ見たことのない自分の姿を、私は夢の中で見ていた。

二度と、そんな姿を見ることができないからなのか。

それとも、そんな風に誰かと笑える未来を、暗示しているのだろうか。

窓を開けると、晴れの天気割に涼しい風が入り込んでくる。

真夏日と呼べる日はいつの間にか通り過ぎ、空の奥では、そろそろ寒さの身支度を整えているようだった。

家に閉じこもるようになって2度目の夏が、終わろうとしている。

私はピアノの上のヒマワリを見た。

夏が終われば、ヒマワリも終わってしまうのだろうか。

夏の間ずっと部屋に咲き続けたヒマワリは、秋にはコスモスやキンモクセイへと変わっていくのだろう。

傾いていく陽が、やけに赤く、燃えていた。

前に見た、岬さんを照らした陽の色と同じだった。

そして。

前に見た、あの絶望の日の燃え方と、よく似ていた。

目に飛び込んでくるのは、真っ赤に燃えている“なにか”だった。私はそれが何なのかを確かめるために、一歩前に出た。

けれど、姉が私の腕を掴んで、止められてしまった。

姉の隣にはあのひとがいて、彼の背中には“なにか”があった。

“なにか”は多くの光に照らされていて、あのひとも照らされていた。

私には彼の姿が眩しく、真っ赤に燃えているように見えた。

すべてが燃え尽きて、私はやっと、“なにか”の正体が分かった。

それは、飛行機と、何人も人間だった。

* * *

「今日で夏の暑さは終わり、明日からは過ごしやすい気温になるでしょう」

アナウンサーが言ったのが本当なら、今日は夏の日の終わりになる。

そんな日にかぎって、絶望というのは訪れるものなのだ。

1年前、夏の日が始まると言ったばかりのころに、絶望に墮とされたときのよう。

そんな私の予想を、見事に的中させてくれた2人。

姉と陽路くんが、2人そろってやって来た。

絶望の果て

その日、覚えのある坂を下りた。
行き着いたところにも見覚えがあつて、私は一瞬安心した。

けれどそこは、二度と来たくなかったはずの、絶望の果てだった。
すぐに引き返そうとしたが、直角になった坂を上ることはできない。

助けを呼ぼうとしたが、一筋の光も見えない「ここ」では、自分の声がただこだまするだけだった。

私はこのまま、「ここ」で人生を過ごすのだ。

あるときも、そう思っていた。

そして今も、また同じ運命を辿るのだと、思っていた。

「ノンさん!!どうかしましたか?」

岬さんの何度目かの呼びかけにようやく気がついて、私は驚いて彼を見た。

そのとき私はピアノの椅子に座っていて、無意識のうちに鍵盤の

扉を開き、いくつもの音を同時に鳴らしていた。

部屋に響いた音は、汚く混ざっていた。

「岬さん、来てたんですか」

「今来たばかりです。ドア開けた瞬間、『バーン』って、ピアノの音が聞こえたんですよ。それがあまりにも悲しい音だったんで」

「悲しい音？」

「この世のものすべてを否定するような音でした」

ほら、まただ。

岬さんにはすべて分かってしまう。

「岬さん、本当に詳しいんですね。ピアノのこと」

「知り合いにピアノが上手い人がいて、その人がいろいろ教えてくれたんです」

「音の感情も、ですか」

「音の感情も、です。でもそれは僕自身もピアノをやっていたから分かるんでしょうね。あと、ノンさんのことを知っているから」

一瞬の沈黙のあと、岬さんは何もなかったように、花瓶をキッチンに持っていった。

再びいつもの場所に戻ってきたときには、8度目ヒマワリが咲いていた。

「これで最後ですか？」

と私が聞く。

「何がですか？」

と岬さんが答える。

「ヒマワリです。夏ももう終わりだっていうから。ヒマワリももう終わりかなって」

「そうですね、これで終わりかもしれないし、終わりじゃないかもしれない」

私はまた分からなかった。

岬さんのその言葉が何を指しているのか、どうしても、分からない

かった。

「さつきは、どうかしたんですか？」

と先に口を開いたのは、岬さんだった。

「なんでもないです」

と私が言つて、岬さんがまた何か言つてくる前に、私はひとつ、大きくため息をついた。

「とは、もう言えないですね」

岬さんは開きかけた口を噤んで、私の言葉を待った。

静かになった空間で、私は思っていた。

絶望の淵で、あのとときと違うのは、助けを求める“誰か”がいるということ。

あのととき私の側には誰もいなかった。

今は、私の側に、このひとがいる。

どうしてか知らないけれど、私だけを見てくれている、このひとが。

あのとときと同じところに、あのとときとは違う自分がある。

私はここから抜け出せるかもしれない。

1年前、それが叶わずにとつとつ家に閉じこもってしまった私。

「今の私」には、できるかもしれない。

「岬さん、私はどうすればいいんですか？」

「私は彼に、助けを求めた。」

「あなたの隠しているものすべて、僕に見せてください」

彼は私に、手を差し伸べた。

私はピアノの上に置かれていたものを、岬さんに手渡した。

解放

「招待状？」

表紙に「招待状」と書かれた、薄いピンクの紙を、岬さんは開いた。

そのあと、一瞬動きが止まったかと思ったら、岬さんは私を見た。私は何も言わず、頷くように笑った。

「結婚……するんですか？」

と彼は呟くように言って、再び招待状に目を落とした。

招待状。

音大時代の春、よく寝転んでいたときに目の前に映っていた桜の色とよく似た、薄いピンクに染まった紙。

それは、姉と陽路くんの、結婚式の招待状だった。

「なんとなく、分かっていたんですよ。そろそろなのかもって」

そう、前に姉が来たとき、言っていた。

2人で望に報告したいことがあるから。

それを聞いたときから、私は予感していた。

近いうち、こんな日が来るのだろう、と。

そして今日、2人が来て、照れたように話を切り出そうとする様子を見たとき、私は覚悟を決めたのだ。

「おめでとう」と笑って言うこと。

陽路くんへの想いを少しも残さずに捨てること。

もう一度、絶望に堕ちること。

けれど、「それ」だけは、覚悟していなかった。

おめでとう。結婚祝いなんてあげられないけど。

うん、それなんだけどね。2人で考えたんだけど、望にお願いがあるの。

なに？

教会で、式だけ挙げようって言うてるの。そのとき、望に賛美歌を演奏してほしいの。

「それで、ノンさんは何て？」

と岬さんは言った。

私は自分に言い聞かせるように、そして聞こえていないはずの2人にも念を押すように、もう一度答えた。

「『弾けない』って、言いました」

外に出られないから？

違う。ピアノはもうやめたの。

ノンちゃん、ピアノをやめるのはもったいないよ。ノンちゃんはピアニストとしてやっていける。ピアニストの僕が言うんだから、自信を持っていいんだよ。

違う、そうじゃないの。私は………。

それきり私は話すことをやめてしまった。

2人には、これ以上話すことはできなかった。

「それで、帰りました」

2人は「教会で、待ってる」とだけ言って、帰っていった。結婚式は急なことに、あさってだった。

「どうしても、弾けないんですか？」

岬さんは言った。なぜか彼も、すぎるような目をしていた。

けれど、私にはどうすることもできない。

絶望の日、私は誓ったのだ。

二度とピアノは弾かない、と。

「ノンさん。最後にひとつだけ、教えてください」と岬さんは言った。

「あなたがピアノを弾かなくなったのは、家に閉じこもるようになってからですね。なぜ、そうなったんですか？」

“なぜ、そうなった”

「私も、岬さんに隠していたことはこれで最後です」
私はゆっくりと口を開いた。

最後の過去を、絶望のすべてを、ひとつひとつ解放していくように。

「私はただ、夢を叶えただけなんです」

はじまりの夢

最後の過去を私がゆっくりと話し始めたのは、初めの言葉を口にしてから10分ほど経ってからだった。

次の言葉を探しても、なかなか出てこなかったのだ。

「ノンさん、ゆっくりでいいです。心の中で記憶をたどって、頭の中で言葉を選んで、ゆっくりと話してください」

岬さんはそれを見透かしたように、言った。

私は一息大きく吸って、溜めた空気をまた戻した。

そして岬さんの言うとおりにゆっくりと、過去を少しずつ思い出すことから初めて、それを頭の中でまとめ、言葉をつないでいった。

「陽路くんは、私が高校3年生のときに世界コンクールで最優秀賞を獲って、ピアニストとして活動し始めました」

そのとき陽路くんは音大を卒業したばかりだった。

世界コンクールに出場するには、その前に日本代表にならなければならぬ。いわゆる、予選というやつだ。

陽路くんは音大の学長の推薦で、その予選に出ることになった。

そして、見事に日本代表となったのだ。

世界コンクールのために、陽路くんはオーストリア・ウィーンの街まで行かなければならなかった。「音楽の都」と呼ばれ、モーツ

アルトやベートーベンが生まれたところだ。

そのの、最も格式高いとされている歌劇場で開かれた。

陽路くんがピアノを弾いたとき、賞を獲ったとき、私はそこにいた。姉と両親と、陽路くんの両親も一緒に。

陽路くんの優勝を信じて疑わなかった私は、会場に入る前に花屋で大きな花束を包んでもらった。私がおこづかいとして持っていた1万円をユーロにして、「これでできる最高の花束を作ってください」と言っつて全額渡した。

姉は、気が早すぎよ、と笑っていた。

けれど私は思っていた。そうではない、と。

遅すぎるのだ。

世界が、陽路くんのピアノを認めるには。

壇上から降りる陽路くんを、いくつものフラッシュが迎えた。

彼はあまりの眩しさに、思わず右手で目を覆った。

私は、輝く陽路くんをじっと見ていた。

私も“あそこ”に立つことができたら、彼と並ぶのだろうか。誰も追いついてこれないくらいの、あの高さまで、行けたら。

陽路くんはインタビューを受けていた。

「最後に、誰が一番伝えたいですか？」と聞かれた彼は、客席をきよるきよる見回すと、私たちを見つけた。

陽路くん、誰に伝えるの？

おじさんとおばさん？

私？ それとも姉？

あなたの周りのすべての人たち？

陽路くん、“誰を見るの？”

すると彼の目は、懇願の思いで見つめる、私を捉えた。

「僕が、僕のすべてを与えた、未来のピアニストに伝えます。次は君の番だよ、って」

嬉しさが、羽を伸ばして飛んでいきそうだった。

私はそれをぐっと堪え、いつまでもその嬉しさを心の中で噛みしめた。

彼が、私の信じていたとおり、優勝したことではなく。

他の誰でもない、私を見てくれたことでもなく。

もちろん、彼のすべてを与えられたのだということでもなくて。

「それは恋人ですか？」と聞かれた彼が、「いえ、妹みたいなものです」と即答したことさえ、悲しむのを忘れるほどに。

私は、私の中に生まれたばかりの夢と、彼の託した夢が同じだったことに、この世のすべての幸せを手にした瞬間のような、声にならない、誰にも言いたくない、そんな、ひとりじめの嬉しさを、抱いていた。

絶対に、夢を叶えてみせる。

望むだけでは終わらせない。終わらせることなんてできない。

まだ止まない拍手喝采の中にいる陽路くんの隣に、そっと、自分を並べてみる。

私たちは、光を浴びていた。

夢を叶えられたことへの、祝福と賞賛のような。

世界中の、まばゆい光を。

あの高さまで

まず、音楽学校に入ることから、始まる。

1、面接のとき、どんな形でもいいから、自分を印象づけておくこと。

それを実技での評価を合わせたら、みんな「浅羽望」の名前を覚えるだろうから。

- 2、毎年、入学式での生徒代表演奏者に選ばれること。
- 3、最低でも1人の先生のお気に入りになっておくこと。
- 4、学校に毎日まじめに通うこと。

これが陽路くんによる、世界コンクールまでの近道だった。

* * *

世界コンクールの余韻は真夏の暑さで勢いがついたように、日本のマスコミはしばらく陽路くんを離してはくれなかった。

演奏会やソロコンサート、オーケストラのピアノ伴奏。テレビや雑誌で、陽路くんの姿を確認する日々が続いた。

秋になって、ようやく木枯らしが陽路くんを助けてくれた。まるで冬眠の準備に入りだしたように、陽路くんを取り巻いていたものは静かに去っていった。

そして私は1か月振りに、彼と再会することができた。

「ねえ、陽路くん。私もあの舞台に立ちたいんだけど」
指ならしの練習曲を弾きながら、私は言った。

「世界コンクール？ なに、やっとやる気になった？」
と、彼は嬉しそうに笑った。

小学2年生のころから出場していた、全日本ジュニアコンクール
中学生になって、私はぱったりと、そこから姿を消した。
陽路くんはもつたいない、と嘆き、何度も出るように言った。

「優勝したら、なにか賞品がもらえるかもしれないよ」とまで言っ
た。

「ものになんか、つられないよ」

私は「いらないもん」の、一点張りだった。

そう、いらないのだ。

コンクールでは、小学生の部と中高生の部に分けられる。

私が中学2年までは、陽路くんも高校生。彼と競うなんて、私に
はできなかった。

それに、どんなに頑張っても私は陽路くんの音には敵わない、と
いうことはよく分かっていた。

仮に出場したとしても、私は大差の敗北を味わうほかない。

到底、彼には追いつけやしないんだ、と。

そんな悲しみは、いらない。

それに、私が高校生になると、陽路くんはジュニアに出場できな
くなる。

彼は大人たちの、全日本コンクールのほうへいってしまっ

矛盾しているけれど、だけど私は、彼のいないコンクールでの優
勝なんて、いらなかった。

でも、世界コンクールは違う。

私にだって、遠い、遠い、あの高さまで、行けるのだ。

それこそ、ウィーンまでの距離と同じくらい遠いところに。
今までの敗北感や諦めすべて飛び越えて。

ついにそこまでたどり着けたら、私は彼に伝えることができる。

ずっと行きたくて、行けなかった。

言いたくても、言えなかった。

ううん、もし言ったとしても、聞こえていなかっただろうね。

私はここにいるよ。あなたのすぐ隣に。

本当は昔からずっと、そこに、いたかった。

これからもずっと、そこに、いたい。

「世界コンクールに出場するには、まず日本代表にならないと」

「うん。だから、私も行くこうと思ってるの」

そのとき私は高校3年生だった。

春の進路指導では「未定」だった卒業後が、決まった。

「お父さん、お母さん。私、音楽学校に行きます。陽路くんも通っていた、日本最高の音楽学校へ」

これが、私の最後のおねだりだった。

卒業式のあとに

「それで私は、音楽学校に入学しました」

初めこそつつかえていたものの、そのあとは流れ落ちる滝のように、言葉が出てくる。

一息入れましょうか、と言って岬さんはキッチンに立った。

私は、わたしの上の時計を見た。ちょうど午後2時を過ぎたころだった。

岬さんの入れてくれた冷たいミルクティーを、私はごくごく飲んだ。

甘すぎるくらいのミルクティーが、カラカラに渴いてしまった喉を冷たく潤していく。

過去の重みを吐き出すたびに、声が哽れていくみたいだった。

結末を話す前に、私はとうとう声を失ってしまっんじゃないか。

そうになったら、結末は分からないまま、一生誰かに話すこともないのだろう。

なんてことを考えてみては、もうそんなことも言ってもらえないところまでできてしまっているのに、と思う。

今こうやって岬さんに話しているのは、紛れもなく、私の意志だった。

決して岬さんに追い詰められたからではない。たとえきっかけがそうであったとしても、私は自分が話したくて、そうしているのだ。もうあと少しで、すべては語り尽くされる。

そのあとには何が待っているのか、私は知りたかった。

岬さんは何も話さなかった。

カラン、と氷がぶつかり合う音だけが響いて、まるでそこだけが切り離された部屋みたいに、お互いの気持ちさえ感じ取ることできるような、透き通った空間だった。

私は岬さんを見た。

岬さんが、私を見た。

「次を、話しますよ」

「どうぞ」

と、お互いの心の中を読み取って、私は再び話し始めた。

* * *

4年生になって、私は3度目の、生徒代表に選ばれた。

ついに3度目。これで絶対、私で決まりだ。

と、心の中で何度も喜んだ。

陽路くんの掲げた4か条を、私はやり遂げることができた。

新入生のときは面接と実技の結果で学年首席になった。3年連続で、生徒代表の演奏者にも選ばれた。授業は相変わらずサボる日々だけれど、学校を休んだことは一度もない。先生のお気に入りになることだけれど、成沢先生は私の味方になってくれるだろう。そのために、ちゃんと媚も売っておいた。

私の努力は実り、学長から「世界コンクール日本代表予選会」の推薦をありがたく受けることとなった。

それを聞いたのは、卒業の前日だったと思う。

「成沢先生はもちろん、宇津井先生からもお墨付きが出ている。授業をよく遅刻していたという点もあるが、それでも君を推薦する価値はある」

と学長は言った。

あのカマキリ女が私を褒めてくれたなんて、と私はとても驚いていた。

卒業式でも「浅羽さんは本当にサボってばかりで、私も大変だったわ」なんて言っていたほどなのに。

とりあえず私は、やっと夢への切符を手にする事ができた。

そして絶好調の私に、日本代表になるのは簡単なことだった。

153

「ノンさんがいなくなったら、寂しくなるな」

卒業式のあと、私はお世話になった中庭の、桜の木の下にいた。すると背後から声が聞こえて、振り向くとそこには洸がいた。

洸。

彼はあの初めての出会いから、よく中庭に来るようになった。

それも、授業中。私がサボっているときに。

「また来たの？ 1年生が授業サボっちゃダメだって、昨日言っただけでしょ」

洸は私が寝転んでいると、また「浅羽さん」と呼びかけた。

昨日と同じ、彼の後ろには桜の花が舞っていて、桜の精霊のようだった。

「いいの。俺はもともと落ちこぼれたから、これ以上悪くなんないよ」

「落ちこぼれなら練習しないと上手くならないでしょ」

「じゃあ浅羽さんが教えてよ」

「なんでよ。私なんかより先生の指導受けたら？」

そう言うと、彼は笑い出した。

「なに笑ってるの」

「だって浅羽さん、先生のこと信用してないでしょ。そんな人に教わってっていうの、ヘンじゃない？」

どきっとした。

黙り込んで、それ以上何も言えないでいると、彼は笑ったまま、言った。

「浅羽さんって、望って名前だね。じゃあこれから『ノンさん』って呼ぶことにしよう」と

彼は立ち上がり、「じゃあ今日はおとなしく授業に出ようかな。

ノンさんも、ほら、先生が来たよ」と、校舎のほうへ歩いていった。

途中、カマキリ女とすれ違いざまに怒られて、それをまたうまく交わしながら。

最初に私のことを「ノンさん」と呼んだのは、そういえば、洸だった。

そしてそう呼ぶのは、洸と、岬さんだけだった。

春の使者

不思議な人だった。

何かがおかしいのではなくて、何もかもが。

彼を表すすべてが、不思議だった。

洸は自分のことを話そうとはしなかった。

「ノンさんって、どうして授業サボってるの？ 連れ戻されるのは分かってるのに」

「ねえねえ、ノンさんって何人きょうだい？」

「ピアノ、いつからやってるの？」

と、いつも質問してきては、私が曖昧に返すのを、不服そうにしていた。

あまりにしつこくて、「洸はどなの？」と聞き返すと、彼は「ひどいや、ノンさんてば」と言っつて、またも不服そうにぶつぶつ言っつていたのを覚えている。

このときは、気にしていなかった。

もっと早く気づくべきだったのかもしれない。

洸が、私と同じように、自分を隠していたことを。

洗のことを初めて知って、またすべて忘れたのは、同じ日だった。

振り向くと彼がいて、卒業おめでとう、と、ヒマワリを一輪差し出した。

「え？ ヒマワリ？ この時季に、なんで……」

すると洗は笑って、
「世界って不思議だよ。日本は冬なのに、どこか遠い国は夏だったりするんだから」

と言った。

「もしかして、世界中探したの？ うそ、そんなこと……まさか」

「そのまさか。でもその国のはタネがすごく大きくてさ、一輪だけもらってきたんだ」

「なんでそこまでしてヒマワリなの？ 今の時季に咲いてる花でいいじゃない」

「だめだよ、ヒマワリじゃなきゃ」
「なんでよ」

洗は俯いて何か考え込んだのかと思うと、ぱっと顔をあげて口を開いた。

その瞬間、大きな音を立てて、風が通り過ぎていった。

まるで、飛び立ったばかりの飛行機を、目の前で見送ったときのような轟音で。

まるで、天が怒りを風にのせたみたいな強さで。

「ごめん、聞こえなかった。何て言った？」

というより、いきなりの突風に思わず目を閉じてしまったから、彼が何か話したのかさえ分からなかった。

「ひどいや、ノンさんてば。聞いてないんだもんなあ」

と、洗は顔を赤らめて言った。

「しょうがないでしょ。で、なに？」

「だから……」ノンさんにはヒマワリが似合うから『って言ったの。それに俺、ヒマワリが一番好きな花なんだ」

そう言うと洗は、私に背を向けて校舎のほうへ歩いていった。

私はその後ろ姿を見て、思わず叫んだ。

「ありがとう。私もヒマワリが一番好きな花なの」

洗は振り返って、なおも後ろ向きに歩きながら言った。

「俺のこと、覚えておいて。俺も、ノンさんのこと忘れないから。」

じゃあね、ヒマワリ好きなノンさん」

そして再び私に背を向けると、二度とこちらに顔を向けることはなかった。

正直なところ、私はヒマワリが好きだったわけじゃない。

嫌いではない。ただ、何とも思っていない、というのが本当だ。

でも、あのとき、どうしてもそう言わずにはいられなかった。

何度も見てきたはずの洗の去っていく背中が、消えていってしまつように見えた。

あの突風に、連れ去られていくみたいだ。

彼は桜の精霊だから。

時季外れな3月に、洗は姿を現してはいけなかった。

時季外れなヒマワリに、愛を感じてはいけなかったのだ。

改めて思い返すと。

春。桜の下でしか、洗と会うことはなかった。

夏も秋も冬も、洗は私の元へ、やって来なかった。

そう、もっと早く、気づくべきだった。

夏の始まり（前書き）

ついに望の過去の最後となる、「絶望」編です。

夏の始まり

「岬さん、『絶望』って知ってますか？」

彼にすべてを打ち明け、あと、残っているのは「絶望」だけだった。

「『絶望』ですか……」

岬さんは俯いた。

私は、そんなもの知らないでしょう、と、思っていた。

そんなとき、不意に岬さんから漏れた言葉を、私は一瞬疑った。

「知ってますよ」

と、岬さんは言った。

「うそ」

私は言った。

「本当です。ノンさん、僕があなたのことを分かっているのは、僕たちが同じだからです」

「同じ？」

「そう」

岬さんは言葉を続けた。それはあまりに哀しく、まるで泣き叫ぶような声で、綴られた。

「僕も“そこ”に、堕ちたことがあるんです」

時計は午後2時半を知らせていた。

話し始めてから、時間の流れがすごく遅く感じる。

それは、思い出す過去の記憶の量が、多すぎるせいだろうか。

時の流れに逆らって、過去を振り返っているから。

しん、とした静寂に包まれた部屋は、暑さをすでに失っていた。太陽はもう下りる一方らしい。

そんな夏の終わりを、いま、この空間は、ひっそりと告げていた。そのの、まったく逆。

沈むことを教わらなかった太陽が、ひょっこり顔を出して、夜になつてようやく月が太陽を隠してくれた日。

私が“そこ”に墮ちたのは、そんな夏の始まりだった。

* * *

世界コンクールを、明日に控えた日。

私と姉と、陽路くんは、ウィーンに来ていた。

ウィーンのシュベヒャート空港には、現地で演奏会に参加していた陽路くんの両親が迎えに来てくれていた。父と母は、明日の朝に着くらしい。

その足で、私は会場へと向かった。

参加者は前日に一度だけ、本番に使うピアノで弾く機会が与えられていた。

もっとも、世界コンクールの説明を私はまとも聞いていなかった。それで、それらは陽路くんが去年やったことを教えてくれたのだ。「さすが世界コンクールって思ったよ。なんていうのかな、鍵盤の重みみたいなもの感じられるし、舞台上に置かれているだけで存在感や威圧感もある。そんなピアノだった。あれを弾きこなそうとする

のは、すごく勇気のいることだったなあ」

と、陽路くんは言った。

「やめてよ、プレッシャーかけるの」

と私は言った。

けれど、私はプレッシャーなどの緊張の類を、ひとつとして持ち合わせていなかった。

明日になればそれも変わるのかもしれない。

でも今、この瞬間は、私は自信に満ち溢れていた。

それは、世界コンクールに出ると決まってからの2か月間、陽路くんがつきつきりでレッスンしてくれたこともあったし、なにより、夢がとうとう形になっていったことへの喜びが大きかった。

ここで、私の夢は叶うんだ。

世界中の祝福を受けながら、私は夢を叶えることができるんだ。

なんて幸せなことなんだろう。

前の演奏者が練習を終え、ついに舞台上上がったとき、私はそう思わずにはいられなかった。

明日は私にとって忘れられない一日になる、と。

だがそれは、思ってもみない形で現れることとなった。

ホテルの最上階から見える、鮮やかなスカイブルーの空。

そこに、戦争の爆撃のあのような、凄まじいほどの煙が、ウイ

ーンの街を覆って、空へと登ってきていたのだ。

まるで、絶望の淵を表すみたいに、暗く汚れた色をして。

きのこ雲

あれは、いつだったか。

広島に家族旅行に行ったとき、私はひとり、原爆資料館へと向かった。

当時の写真と、そこに残ったものの複製。

それらは、戦争の恐ろしさと、爆撃の酷さを、十分に教えてくれた。

その中で、もっとも目を奪われたもの。

それが、空に映った、きのこ雲の写真だった。

そして今、この爽やかなウィーンの朝にも、同じ景色を見た。

ただ、それは、遠かった。

そして、世界コンクールの行われる会場とは、逆方向だった。

だから私は、あまり気にも留めずに、事故が起きているくらいにしか思わなかったのだ。

会場入りしたのが、12時。

姉と陽路くんは両親を迎えに空港へ行ってから来ることになっていた。

コンクールの開始が午後1時。飛行機の到着は12時半ごろ。空

港からここまで、タクシーを使って20分もかからない。

陽路くんの両親は3日後に控えた演奏会の準備に行っていて、私
の出番には抜けてくる、と言っていた。

参加者は30人ほど。私の出番は7番目。

午後1時ちょうどに、コンクールは開かれた。

といつても、晴れやかなセレモニーなんかはもちろんなくて、1
人目の演奏者がすでに演奏している。

2人目、3人目、4人目……コンクールは順調に進んで
いた。

だけど、姉も陽路くんも両親も、誰も、来ていなかった。

5人目が演奏しているときに、私は会場の外まで出た。目の前の
広い道路は、空港までの道のりを案内してくれる。私はそこをじっ
と見ていた。

1台でもタクシーが停まれば、それはきっと……。

すると、目の前でちょうどタクシーが停まった。
急いで降りてきたのは、陽路くんの両親だった。

私は2人に駆け寄って、言った。

「おじさん、おばさん。あのね、お姉ちゃんたちがまだ……」

「望ちゃん！一緒に来て！」

おばさんは私の腕を引っ張って、タクシーへと乗せた。

私は力を込めて手を振り払うこともできずに、言われるまま“ど
こか”へ行った。

「ねえ、どこへ行くの？もうすぐ私の番なの。もう間に合わない
よ」

私はだんだん遠くなっていく会場を後ろ向きに乗り出して言った。

会場は急速に離れていき、ついに、見えなくなった。

あと少しで夢が叶うの。

なのに、なぜ邪魔をするの。

この夢だけは、絶対に叶えるんだから。

「止めてください。ストップ！」

私が運転席まで身を乗り出すと、運転手は驚いて私を見た。けれど、ハンドルはしっかりと握られたまま、アクセルは力を込められたままだった。

「望ちゃん、聞いて。さつき、飛行機事故があったの。私たちが向かっているのは、飛行機が墜落したところ。陽路と叶ちゃんは、先に行ってるわ」

おばさんは、興奮した私の肩を両手で押さえるようにして言った。

飛行機事故。

さつきのきのこ雲。

「飛行機事故？ お姉ちゃんと陽路くんもそこに？」

わたしが「まさか」と思っていること。

「そんなことあるはずない」と、思っていること。

おばさんは言葉にできない様子で、けれど、ぐっと思いを吞んで、言った。

「その飛行機に、望ちゃんのお父さんとお母さんが乗っていたのよ」

飛行機事故。

それに、両親が乗っていたとは。

さっきのきのこ雲。

あれが、両親の姿だったなんて。

いったい、どうやって、想像できたんだろうか。

燃えたのは

そこは、地獄のようだった。

原爆資料館で見たきのこ雲の、その横に展示されていた写真を彷彿させる。

きのこ雲が空に咲いたとき、地上では声が溢れていたという。それは泣き声のようであったし、呻き声のようにも聞こえた。そんな、無惨にも生き残った人々の姿。無惨に砕け散った世界。写真は、きのこ雲の果てを映していた。

“そこ”も、そうだった。

私が墜落現場に着いたとき、もうだいぶ時間が経っているというのに、機体からは炎が燃えさかり、勢いをつけているようだった。救助隊の消火活動など、まるで相手にしていない。

私たちは姉と陽路くんを探し回った。けれど、報道陣や野次馬を掻き分けるのはとても困難で、なかなか2人の姿を見つけることができない。そのうちに、おじさんとおばさんとも、はぐれてしまった。

飛行機はなおも燃え続け、そこから人を助けることなどとてもできないだろうと、私は分かっていた。

両親はもう……。

分かっていて、だけど、ただ泣き叫ぶことなどできなかった。

「お父さん！ お母さん！」

と、背後から聞き慣れた言葉を耳にして、私は振り向いた。

そこには、陽路くんにもたれかかって泣いている、姉の姿があった。

私が絶望に堕ちたのは、この瞬間だった。

「ノンちゃん」

陽路くんが私を見つけると、姉も私のほうを向いて、けれどまたすぐに陽路くんの胸に顔をうずめてしまった。

私は、ぼうつと膜が被さってしまった瞳の奥に、真っ赤な“なにか”を見た。

あれは何？

そう思って、一步一步進んでいく。

“なにか”はゆらゆら揺れて、瞳にはそれしか映らない。

なんだが、綺麗。

その正体を知りたくて、私はさらに一步、前が出る。すると、後ろからの強い力に引き戻されてしまった。

同時に、目の前の靄もやがすつつと解けていって、私は絶望から舞い戻された。

「やめて！ これ以上前に出たら、望だって危ないのよ！」
と、腕にしがみついて、すぎるように姉が言った。

その姉の隣で、彼女を支える陽路くんがいた。

その彼の後ろで、いくつもの光が“ なにか ”を照らしていた。

光はあまりにも眩しくて、私は思わず目を閉じる。

ゆっくりと目を開いていくと、視線の先には真っ赤な炎と、救助隊のライトがあった。

それが、「陽路くんが真っ赤に燃えていた」姿だった。

何時間経っただろうか。

ようやく消し止められた火。

そこから、生きて出てこれた人はいなかったという。

私が見た「真っ赤」で「綺麗」な“ なにか ”は、すべてを燃やし尽くしたのだ。

間接的に、私の心さえも。

真実

ウィーンの夏は、日本ほど暑くない。特に、今は夏の初めだから、夜になると少し肌寒くも感じられる。

そんな中、飛行機事故の犠牲者たちの合同葬儀が、墜落現場から程遠くない、ウィーンの街を少し外れたところの小高い丘で行われた。

フランクフルトからウィーン行きの飛行機で、死者は約200人にもなった。そのうち日本人の死者は20人あまり。ツアーなどによる日本人の被害はなかったそうだから、個人での旅行者だったのだろう。

結局、墜落の原因は分かっていない。唯一知っていると言われる機長が、死んでしまったから。

また、正確な死者も、分かっていない。遺体と遺品の、ひとかけらでさえも、跡形もなく燃えてしまったから。

私たちは一度日本へ帰って、すぐにウィーンへと戻った。合同葬儀を行うと聞いたので、喪服だけを持って。

呼び寄せられた遺族たちが、中身のない墓を目の前にして、泣き崩れていた。

姉なんて、毎日毎日泣いて、とうとう涙が出なくなると、今度は声を嗄らすまで叫んだ。

その横で、私は、立っていた。

姉のように、泣くことも、叫ぶこともせず。

それができればどんなに楽だろう、と思いながら。

日本へ帰ってきたのはその次の日だった。

陽路くんの両親は演奏会のためにウィーンに残らなければならなかったけれど、陽路くんと私は、姉の「早く家に帰りたい」という希望で、一緒に帰ることにした。

3人揃って、重い足を引きずりながら、ようやく家に着いたのは夜だった。空港から品川駅までは電車を使い、それから家までの道を、私たちは歩いた。それぞれ、心になにかを想いながら。

「お姉ちゃん」

姉が家のドアを開けたとき、私は外から、言った。

「私、もう二度と、外に出ない。私は私だけの場所で、閉じこもって暮らす」

そうして向かったのは、親の持つアパートの、2階の一番奥の部屋。

喪服を取りに戻ったときに、身の回りの荷物とランドピアノの移動を、きつちりと済ませて。

* * *

「これが、家に閉じこもるまでのすべてです。岬さん、あなたの欲しかった答えはこれです」

岬さんは、私から目を逸らさずに言った。

「これで全部、ですか？」

「そう思いませんか？」

「ノンさん、あなたはまだ、肝心なことを隠しているでしょう」

私はふふ、と笑い、それでも表情を変えない彼に、言った。

「敵わないな、岬さんには」

一息ついたあと、

「『ノンさん、あなたが家に閉じこもるようになったのは、“なにが”理由なんですか？』って、言うんでしょう？」

と私が言った。岬さんは開きかけていた口を噤んで、驚いた。☹
星です、とでも言うような顔をして。

「岬さん、前に『最低ですね』って、言いましたよね。でも、本当に最低なのは……」

本当に最低なのは、あ那时候。

燃えさかる炎を見ても。

跡形もなくなった“そこ”で泣き崩れる姉の隣にいても。

墓前に立っけていても。

私は、両親の死を、悲しんでなんかなかった。

愛のかたち（前書き）

望の過去がとうとうすべて終わりました！

絶望に堕ちた本当の理由が明らかになります。

ただ、作者も描いてて思ったんですが、今回は「愛」がテーマになつていて、分かりにくい表現が多いと思います。

なのであとがきに簡易補足をしました。そちらを見てもらうとちょっと理解できるかもしれません。

愛のかたち

「私は、両親の死を悲しんでなかった」

沈黙のあと、

「……なににも聞かないんですか？」
と私が言った。

岬さんはふつと私から視線を外して、言った。

「僕にも、同じような覚えがあります。目の前の悲しみではなく、隣の、あるいは周りの人のことを、どうしようもなく、想ってしまっただけが」

岬さんの視線は、私の後ろ、あのきのこと雲が広がった日のような鮮やかなスカイブルーの空に向けられていた。

けれどそれはすぐに私に戻され、

「だから、分かるかもしれません。ノンさん、あなたがあのとき、何を想っていたのか」

と、岬さんは言った。

私が想っていたこと。

両親の死よりも、想わずにいらなかったこと。

それは、あまりに哀しくて、残酷な、私の運命だった。

* * *

愛ほど見分けのつかないものはない。

それを、今になってようやく思い知る。

私はあのころ、姉を憎み、陽路くんを愛していた。

それがまず、間違っていたのだ。

姉への憎しみ、それは家族を愛していたから。

憎まずにはいられなかった。“家族”は、私が初めて愛され、愛してきた場所だった。それを“姉が奪ってしまった”のだ、と思うことしかできなかつたから。

私がおもしも、姉が来たときのことを、家族愛が増えたと思うことができていたら。

きっと、違っていた。

何もかも、違う結果になっていただろう。

そして陽路くんへの愛情とは、実は兄弟愛にも似たような感情だったのだと、どうして気づくことができなかったのだろう。

家族への愛を失って、私の愛のよりどころは、陽路くんしかなかった。

変わらず大事にしてくれた彼を愛することは必然的なことで、けれど同時に、絶対やってはいけないことだった。

彼を愛してしまつたら、私はついに、家族を愛することができなくなってしまうのだ。

愛はひとつしかない、と、勘違いをしていたから。

でも、愛はひとつだけじゃない。私が望めば、愛はいくらでも生まれたのだ。

ただ、陽路くんへの愛。

それだけで、夢を持ち、努力し、叶える寸前まで生きてこれたか
ら。

望むことさえ、忘れてしまったかのように。

他のものをすべて否定することで、生きてきた。

たくさんのお愛を、もっと知っていたら。

愛の種類とその無限さを、あのころ理解していたら。

こんなふうにお絶望の墮ちることもなく、姉のように、ただ両親を
失った悲しみだけを抱いて、泣き崩れることができたのに。

「最初に絶望と出会ったとき、私は一瞬にして、その暗い闇に墮と
されました」

それは、墜落現場で、姉と、陽路くんを見つけたとき。

そのとき、姉と陽路くんは抱き合っていた。

私は2人が、お互いに対して“ひとつしかない愛”を抱いている
のだと、気づいた。

あのころ、私にとって愛はひとつだけだったから。

陽路くんが愛しているのは、私が憎んでいる姉なんだ。誰も、私のことなんて愛してくれない。

そんなふうにはしか考えることができずに。

陽路くんも姉も、私をちゃんと愛してくれていたことを知らずに。

たったひとつの愛を失って、私には、何もなくなってしまった。

からっぽの心は、絶望に、堕ちるしかなかった。

愛のかたち（後書き）

補足

「あのとき」とは、飛行機事故のとき。望は「愛はひとつしかない」と思っていました。だから、陽路くんが姉を愛しているのだと気づいたとき、私の愛は陽路くんにあるのに、陽路くんの愛はわたしにはないのだと思い込んでしまったんです。それが「絶望」への理由になります。陽路くんの愛が憎い姉へと向いていたことも大きいかもしれません。

でも「いま」、岬さんに話しているとき、私はようやく「愛にはいろんな形があるのだ」と気づきます。恋愛、友愛、家族愛、情愛などなど。それは、閉じこもるようになってから姉と岬さんの「私への愛」を感じることができたからだと思います。

もっと早く愛を知っていれば、望の人生は変わっていたのかもしれない。

あんまり分かりやすくなくてすいません。

まだ絶望の中

ゆっくり目を閉じると、私はいつの間にか絶望の底から抜け出していた。

ずいぶん軽くなった心が、それを証明している。

けれど。

恐る恐る、下を見ると。

絶望は、まだ“そこ”にいた。

どれくらい、上ってこれたか分からない。

ものすごく遠いのか。すぐ側にあるのか。

とにかく私は、まだ絶望の中にいた。

「それが、あなたのすべてなんですね」

と岬さんが言っつて、はっとして目を開いた。

「こんなつもりじゃなかった」

「え？」

「岬さん、以前にも言いましたよね。すべて話してくれる日はくる

か、って。私はそのとき、一生話すつもりはないと、固く心に誓ったんです。でも結局こんなふうに、話してしまった。本当に、すべてを」

すると岬さんは笑って言った。

「僕はノンさんのことを分かりたいと思った。その思いがノンさんに通じたんじゃないかって、思ってます。ノンさんは僕の愛を感じていたんじゃないですか？ 自分を愛してくれていると思うことができましたから、話すことができたんじゃないですか？」

岬さんの愛。

私は彼に、何度も助けられていた。

自分でも気づかないうちに、私はそこに、愛を感じていたのかもしれない。

彼の心の中にある、温かい愛を。

岬さんはヒマワリを一輪、花瓶から抜いて、私に差し出した。

「ノンさん、あなたを愛しています」

初めて会ったときからあなたは僕にとってヒマワリのようなもので、彼は言った。

私はその手から、ヒマワリを受け取った。

たくさんの愛のかたちの中で、岬さんへの愛は、一番大きなものだったから。

それがどんな愛なのかは、まだ分からないけれど。

私の心に、岬さんへの愛は、確かに存在するから。

「ねえ、岬さん。そろそろ教えてください。あなたは一体、何者なんでしょうか？」

そういつた瞬間、岬さんの顔から緩みが消え、ぱつと真剣な顔つきになったのを、私は見逃さなかった。

彼はすぐに笑って、

「僕は何者でもないですよ」

と言った。

けれど私には分かっていた。

何か隠している、と。

彼の愛を受け入れたいま、私には分かる。

私を愛していたという彼が、私の心を見透かしていたのと、同じように。

「じゃあ、教えてください。私たちが初めて会ったときのことを」

「前にも言ったとおり、ノンさんは覚えてないですよ」

「だから、なんですか？」

「それは……」

とうとう彼を追い詰めた、と思った。

こんなに慌てる岬さんを見るのは、初めてだったのだ。

だけど彼のひとことで、私は逆に、追い詰められることになる。

しどろもどろになった岬さんは、ピアノの上の招待状に目をやった。

「これ、結婚式ってウィーンでやるんですね。ノンさん、出発は明日ですか？」

彼は話を逸らそうとして、軽い気持ちでそれを掴んだ。

それは、私の心を乱してしまった。

もうあと少しのところまで、彼を追い詰めたのに。

そう思いながらも、私は動揺を隠すことができなかった。

「……………いえ」

「じゃあ、あさってですか？」

「……………」

明らかに変わった空気を感じ取って、岬さんは言った。

「ノンさん、もしかして……………」

彼がその続きを言う前に、私はきっぱりと言った。

「ピアノはもう二度と、弾くつもりはありません」

絶望の中にいたのは、あの日、ピアノを二度と弾かないと誓った私だった。

今の私を、岬さんは愛してくれただけだ。

その前の私　姉を憎んでいた私。ひとつの愛のために夢を叶えようとした私。両親の死を悲しむことができなかった私　は、誰からも愛されていないと思ったまま、絶望に堕ちてしまったから。そのころの私が、まだそこから抜け出せないでいた。

「あのころの私が確かに愛されていたと思うことができれば、私は絶望から抜け出すこともできるかもしれない。でもそれは、絶対にありえないことだから」

私がそう言うと、岬さんはもう一輪ヒマワリを取って、言った。

「これ、もらってもいいですか？」

そして私の手を取って、彼は玄関へと向かった。

外へ（前書き）

さて、新展開です！！

とうとう望が外の世界へと飛び出します。

いったい何が待っているのか………

これについてラストですが、ひとつひとつ大切に描いていくのでよろしく願います。

外へ

連れてこられたのは、岬さんの家だった。

岬さんは私の腕を引いて、玄関へ向かった。

そしてそのまま靴を履いて、ドアを開けようとノブに手をかけたのを、私は倒れこむようにして止めた。

「岬さん何するんですか！！ やめてください」

私はノブをめぐらして彼にもたれかかった。そこだけでも、動きを止めるようにして。

彼の力のこもったままの手を、私は必死で押さえつけた。

ほんの少しの間だけ、そこはしん、とした空間だった。

そのときの私は、自分の任務ただひとつを頭に記憶しているロボットのように、今自分がすべきことはこの人の手を離さないことなんだと、それだけを思っていた。

「ノンさん」

不意に岬さんの手が緩んで、彼は言った。

「痛いですよ。そんなに握り締められたら」

私はそれでも力を緩めなかった。油断してしまったら、その際に彼はドアを開けて私を外に引っ張り出すことも可能なんだ、と考えていたから。

本当に、命令に忠実なロボットにでもなったかのように。

「お願い。やめてください……」

小さく、弱々しい声で、私は言った。それはすぐるようであったし、泣いているようでもあった。

「……知ってほしいんです。僕は」

と、岬さんは言った。

「何をですか？」

「あなたの世界はこんな小さなものなんかじゃない。もっと広いところに、あなたの本当にいるべき世界があるはずなんです。だから、僕はそれを知ってほしい」

「私は“ここ”で、十分幸せなんです。岬さんの思っていることは、『余計なこと』です」

私がそう言うと、彼は納得いかないような顔をして、もう一度ノブに力を込めた。

けれど、忠実なロボットは、またもそれを阻止した。

はずだった。

お互いが再び沈黙を抱いたとき、彼の腕に込められた力が強くなっ
っていくのを感じた。

しよせん、男と女の違い。

私は簡単に、彼に負けてしまった。

「やだっ……」

そう思った瞬間は、もう、遅かった。

次に目を開いたとき、私は下がり始めた太陽の光と、ちょうど同じ高さにいた。そしてそこから漏れる陽の光を、一瞬にして取り込んでしまったのだ。

ロボットが壊れてしまうくらいの、強い光を。

午後4時を、もうすぐ迎えるところだった。

私はアパートの外に停まっていた岬さんの車まで、おとなしく歩いた。

岬さんが手を引いて、私は子供のように、彼についていった。ロボットを失ってしまったせいか、それとも光を浴びて、弱ってしまったせいかな。もしくは、そのどちらでもないのか。それは分からなかったけれど、私はただ彼に言われるがままに、ついていった。新しく命令を受けたロボットのようでもあった。

“ただ、彼についていけ”

車が停まり、岬さんに促されて降りると、目の前に花が広がっていた。

何十種類もの花があった。自分に自信を持って咲き誇る、眩しい花たちだった。

その中にヒマワリがなかったのを、気づかないまま。

店の横を抜けていくと、そこには大きな家があった。

「……………ここは？」

「僕の実家です」

「なんで岬さんの家に……………」

岬さんは何も言わなかった。私の手を引いて、彼は家のドアを開けた。

広い玄関、間取りの分からない部屋、驚いて見ているお手伝いさんたち。

それらをすり抜けて、ひとつの部屋の前に、私は止められた。

「どうぞ」

岬さんがそう言って、私は彼の言葉に従うように、その部屋の扉を開けた。

まず、たくさんのヒマワリたちと、目が合った。

その脇に、ヒマワリを引き立てるようにして咲いた花たちがいて。

最後に、中央。

写真に写った、笑顔の岬さんがいた。

2人の岬さん

それは確かに岬さんだった。

今より全然幼くはあるが。

私の隣にいるはずの彼が、位牌の横の、写真に写っていた。

「え？ 岬さん……？」

私は無意識のうちに前へと足を進めていった。気がつくと、写真のすぐ目の前にいた。

写真に手を伸ばしかけたそのとき、背後から岬さんの声が出た。
「ノンさん」

私はビクツと体を震わせた。そしてゆっくりと、後ろを振り返った。

すると岬さんはふつと笑って、

「幽霊でも見ているような目つきですね」と言った。

「これ……誰なんですか？」

「彼の名前は、岬……」
「うそ……！」

私は彼の言葉を遮って言った。言いながら、自分が何を言っているのかさえ分からないほどに、混乱していた。

「岬さんはあなたじゃないですか。これが岬さんなら、あなたは誰なんですか?!」

呼吸が苦しくなる。

これを、なんと呼ぶのだろう。興奮でも高ぶりでもない、だけど、

興奮と高ぶりを持った、この気持ち。

「ノンさん、落ち着いて、僕の話聞いて。僕がこれから話すことは、あなたにとっても関わっていることだから」

「私に？」

「そう」

岬さんはそう言つと、私の隣まで歩いてきて、写真を手に取つた。そして、大事な箱を開けるように、そつと、話し始めた。

「……写真、嫌いだったから、こんな子供のときのしかなかった。小さいときは見分けがつかないほど似ていて、親でさえ分からなかつたくらい」

そして写真を元の場所に戻すと、今度は私のほうを向いた。

そのとき、また背後から声がした。

「潤、お客さん？」

そう言つて私に頭を下げたのは、岬さんのお母さんだった。

私も慌てて頭を下げて、「おじゃましています」とだけ言った。

「母さん、浅羽望さんだよ。彼女がノンさん」

と岬さんが言った。

私にはその言葉の意味が、よく分からなかった。

岬さんが私のことを話しているにしても、「ノンさん」と呼んでいることまで、話すだろうか。それ以前に、岬さんは私との人には話さないような気がしていたから、彼の言葉はとても不思議に感じられた。

すると、岬さんのお母さんは目に涙を溜めて、私のほうへ駆け寄つてきた。

「ああ、あなたが『ノンさん』なのね。ありがとう、あなたがいてくれたから……」

そう言つて、崩れ落ちるように、私に寄りかかった。

「母さん。ノンさんはまだ、何も知らないんだ」

と岬さんが言いながら、彼女を起こして部屋を出ていった。

私は彼女の言葉の意味も理解できずに、ただ立っていた。

「すみませんでした。驚きましたよね」

と言つて、戻ってきた岬さんは、後ろ手で部屋のドアを閉めた。

「いえ………。岬さん、私はまだ何も知らないって、何のことですか？」

岬さんは私の質問には答えをくれず、さっきの続きから始めた。

ひとつひとつ、順番が決まった物語のように。

私との出会いも、私がここにいることも、すべて、物語の中に初めから描かれていたかのように。

「彼の名前は岬洸。僕の、双子の弟なんだ」と、岬さんは言った。

こんなこと、物語の中じゃなきゃ、ありえない。

笑顔の先に

5年も前のこと。

洸と、初めて会ったとき、彼はいたずらな少年のように笑っていた。

あ那时的笑顔が、今でも私の中に、残っている。

洸。

春にしか姿を見せず、また桜がよく似合っていた、桜の精霊。

その洸が、本当のいたずらを、私に残していった。

最後に会ったのは、私の卒業のとき。

あのときから、そこだけ記憶がすっぱり抜けてしまったみたいに、私は洸のことを忘れてしまった。

忘れたというより、思い出さなかった。

あのころ私は、いよいよ自分の夢を叶える寸前のところにいたのだから。

「洸が、岬さんの、弟？」

私は途切れ途切れに、自分の言葉を確かめるように、言った。

「そうです」

岬さんは続けて言った。

「双子なのに、洗だけ生まれつき体が弱くて、小学生まではずっと入院していました。自分でももう学校に通うことや外で遊ぶことを諦めていて、生きる力を失くしていたんです」

それは、私がどうしても知ることでできなかった洗であり、同時に、私の知っている洗ではなかった。

あの、いつも元気な洗が。

私までを引き込む笑顔の、洗が。

とても、信じられなかった。

私は目の前の幼い洗を、ただ見つめていた。写真に写った洗はどこかぎこちなく、笑い方を教わったばかりのような顔をしていた。

「そんなとき、テレビにあなたが映っていたのを、洗は偶然観たんです」

「え？」

私は驚いて岬さんを見た。岬さんは軽く頷くように笑って、言った。

「あれはピアノの全国コンクールだった。ノンさんは10歳で、そのコンクールをすでに2連覇しているとかで、すごく注目されていたんです」

私は聞きながら、思い出していた。10歳ですでに2連覇していたなら、小学校6年生のとき5連覇だったのだから、そのときも優勝したはずだ。毎年、取材も来ていたような気がする。

「でも洗は、初めテレビを観ていなかった。正しく言うなら、そう、流していたんだ。あいつが最も恐れていたのは、音のない世界だったから」

「音のない世界？」

「ひとりきりの病室で、音のない空間に耐え切れなかったんだと思う。いつからか、部屋を訪れると必ず音があるようになってた」
私は洸の、その行動が意味するものを、分かっていた。

音のない世界には、自分が本当に生きているのか、証明するものは何もないのだ。

自分の声を聞いて、誰かの声を聞いて、初めて、生きていることを実感できる。

洸は、確かめたかったんだと思う。

いや、確かめずにいられなかったのかもしれない。

いつ死んでしまうか、分からないから。

「そんなときに、ノンさんのピアノだけが、洸の耳に届いたんだ」
演奏が始まったとたん、洸は身を乗り出してテレビを観た。目をきらきらさせて、ずっと、テレビに映るノンさんを観ていたよ、と岬さんは言った。

それからは、生きる希望を見つけたように、洸は元気になっていった。

ピアノをやりたい、と言い出して、両親がキーボードをプレゼントすると、洸は初めて、笑ったのだという。
遺影は、そのときに撮ったものなのだ。

私は岬さんの話を聞きながら、思っていた。

もしかして、音楽学校で洸と出会ったのは、偶然ではなかったの。

洸は私にとって、桜の精霊だった。

柔らかな笑顔と桜色の頬に、私もいつしか、染まっていった。

春の中庭は、私が唯一見つけた、楽しい時間だった。

の。
洗、私^があなた^の生きる希望^だったなら、なぜ、死^んでしま^った

後悔

それから私は、洗が春にしか現れなかった理由を、聞いた。

「音楽学校に通うこと、医者はすごく反対してた。でも洗自身、ピアノで元気を取り戻したのは事実だし、少しの間だけっていう条件で、許可を出したんだ。そのとき洗は、こう言ったよ」

じゃあ、毎年同じ季節にして。ひとつの季節にしか現れないなんて、なんか不思議じゃん。そしたら俺のこと、忘れないよね。

「洗は夏がいいって言ったんだけど、気温も高いし、なにより学校が夏休みだから。それならってことで、春にしたんだ。暖かい季節だから、洗の調子も一番良かったし」

洗がだんだんはつきりと、思い出される。

私の知っている洗は、体が弱いなんてちっとも感じさせなくて、それどころか私よりも元気で、明るかった。

その洗が、私の記憶の中で、本当に春の使者みたいに現れて、いなくなつたのを、ようやく思い出している。

もし私が洗との出会いをもっと大切に思っていたら、彼が春にしか現れないことにも、きっと、気づいていて。

あのころ私が愛のかたちを知っていたら、洗のことを、愛していたのだろう。

そして、洗が生きていたら、私は彼と、ともに人生を歩んでいた。

洸が生きていれば。

生きてさえ、くれれば。

「ノンさん」

私を呼ぶ岬さんの声が、遠くで聞こえたような気がした。

私は、頬に涙が伝ったのを感じると、とめどなく涙が溢れてきて、どうしようもなく、泣き叫んだ。

耳には自分の声だけが、響いていた。

気がつくと、岬さんは崩れ落ちるようになり泣く私を、頭から抱え込んでいた。

背中にあたる岬さんの手には、ぐっと、強い力がこもっていて、熱かった。

「……………落ち着きましたか？」

岬さんは私の肩を抱き起こして、言った。

私は彼の胸をぎゅっと掴んで、言った。

「岬さん。洸のところへ連れて行ってください」

春の中庭で、あなたと初めて会ったときを、今なら思い出せる。

あのと時の笑顔を、私は忘れてはいけなかったんだね。

冬の名残りの中で、洸は風に連れ去られて、去っていった。

笑顔に、いたずらを遣して。

「洗の仕掛けたいたずらは、しっかりと私の元に、返ってきたよ。」

洗、もう一度あなたに会うことができたら、私は何て、声をかけるんだろう。

そんなことを考えながら。

岬さんのあとを、私はついていった。

岬さんの向かう先、洗のいるところへ。

空と海の間

もう一度洗に会えたら、伝えたい言葉がある。

岬さんのあとをついて、立ち止まったのは、海。

彼が指さしたのは、果てしなく広がる空と海の間側だった。

「そこは、天国なんですか？」と、私は問う。

「そうかもしれない」

岬さんはそう言って、ゆっくりと腕を下ろした。

「ここにいれば、洗に会える？」

「ノンさん、洗に会いたいの？」

「わかってる。そんなこと、無理だって。でも、もし会えたら、言いたいことがあるの」

私がそう言うと、岬さんはもう一度、空と海の間を指した。

「洗は、あっちにいる」

「天国かもしれないところ？」

「違うよ。それは、もっと上の、空の間」

「じゃあ、“あっち”はどこ？」

「あっちは、海の間」

「どう違うの？」

「海の間には、ウィーンがある」

「ウィーン？」

ウィーンには、両親がいる。

天国みたいなところにも、きっといる。

2人は、空と海の間こうにいる。

洸は？

洸“も”？

「岬さん、洸はウィーンの、どこにいるんですか？」

私がそう聞くと、岬さんは私を見て、言った。

「ウィーンの小高い丘の上に、あなたの両親とともに、眠っていま
す」

あの日から、きこの雲が、目に焼きついて離れない。

そして心の中で、いつも叫んでいる。

おまえのすべてを奪ってやったぞ、と。

それを、今になって、本当に奪われてしまったのだと実感する。

気づかないうちに、すべて。

洸をも、つかまえて。

「なぜ、洗はウィーンに？」
「僕も両親も、知らなかつたんだ」と、岬さんは話した。

飛行機事故のあつた日、洗が病室からいなくなったことに気づいたのは、昼過ぎだった。

いつもは朝から両親が来ているのだが、その日は2人とも仕事を外せなくて、岬さんが大学に行く前に寄つたのだ。

けれどそこに、洗はいなかった。

朝食をいつも通りに食べて、そのあとはずっと、キーボードを弾いていたらしい。きっと、飛行機の間もここから空港までの距離もすべて計算してあつて、ギリギリに行動したのだろう。

まさか空港に行っているなんて思わなかつたから、いくら探しても、洗を見つけたことはできなかった。

夕方近くになって、家にいた両親の元に、1本の電話がかかってきた。

洗だ、と思つて電話に出たら、それは洗の、死亡を知らせるものだったのだ。

遺体も遺品もすべて燃えてしまったから、搭乗記録のパスポートだけを手がかりに、死亡者を割り出したのだという。

もしかしたら、洗じゃないかもしれない。
だって、洗がウィーンに行く理由がない。

3人とも、そう思っていた。

でも、いつまで待っても、洸は帰ってこなかった。

すると病室のベッドの下に、洸の字で書かれた、手紙があった。

ノンさんのピアノを応援しに、ウィーンに行ってくる。

絶対ダメだって言われるだろうから、言わなかった。

父さん、母さん、潤、ごめん。

明日、帰ってくるから。

そこに、洸がウィーンに行った理由が、あった。

岬さんは海の向こうを、懐かしむような目で、見つめた。

まるで、彼には洸が見えているみたいに。

目を、逸らさずに。

岬さんの物語（前書き）

今回は3行目から、岬さんの視点で描かれています。

岬さんの物語

岬さんは、私の家から持ってきた一輪のヒマワリを、私に向けた。

「僕があなたと初めて会ったのは、ウィーンなんですよ」

* * *

何も、考えることができない。

何が起こったのかわからないと言ったら、嘘になる。

自分が今、何のために“ここ”にいるのかを、僕はちゃんと理解している。

僕は今、泷に会うために、ウィーンへ向かう飛行機に乗っている。

それはあまりに急だった。

泷が死んだ、という知らせを受けたのは、まだ昨日のことだ。2
4時間も経たないうちに、僕と両親はこうして、泷の身元確認のた
めに、ウィーンへと飛んだ。

通路を挟んで、両親が並んで座っている。

2人は今、どんな顔で、何を思っているのだろう。

僕は昨日から、2人の顔を見ていないし、話もしていない。

いや、「できない」と言ったほうが、正しいのかもしれない。
最後に両親の顔を見たのは、電話を切った直後。
きつと今も、同じ表情をしている。

まるで絶望の淵にいるみたいな。

僕と、同じ顔。

身元確認とは、何だ。

遺体も遺品もないのに、どうやって洗が死んだと分かる？

パスポートだけで知らされた洗の死亡。

本当に洗が死んだのだと僕を納得させてくれるものが、なにひとつ、なかった。

だから僕は、両親のように悲しむことができずに、ひとり、その場に立ち尽くすことしができなかった。

それができればどんなに良かったか、と思いながら。

被害者の合同葬儀を行うと聞いて、僕らは一度日本へ帰り、また

すぐウィーンへと戻った。

僕は空港近くの花屋で、ヒマワリの花を一輪だけ買った。

洗が懂れてやまなかった、ヒマワリを。

俺ずっと、夏になったら外に出るぞって思ってた。この窓から見えるあそこの花壇が、毎年夏になるとヒマワリ畑になるんだ。それがすっごいきれいでさ。小さいときは、いつか自分の手であるヒマワリに触ってやる、ってひそかに夢見てた。ノンさんも、ヒマワリみたいな人なんだ。眩しすぎて、近づけない。でも俺はヒマワリが大好きだから、ノンさんに触れたいって、そう思ってる。

と、洗が話してくれたのは、「ノンさん」が卒業する、ちょっと前。

僕が「ノンさん」を、名前しか知らないころ。

そのとき、僕は気づいたのだ。

洗は「ノンさん」を好きなんじゃないか、と。

世界中探し回って、ようやく見つけた一輪のヒマワリを、彼女にあげたんじゃないかと。

今度は「ノンさん」に代わって僕が、洗にそれをあげよう。

そう思って、僕はウィーンの街から少し外れた小高い丘へ向かった。

そこで、彼女と会ったのだ。

小さいころ一度だけ見た、全国コンクールの映像。

その面影を引きずった、凜とした表情。

洗の愛する「ノンさん」と、僕が初めて出会った瞬間。

最終話・幸せの音（前書き）

ついに最終回を迎えることができました。

次回はおまけエピソードを載せたいと思います。
詳細はあとがきのほうで。

最終話・幸せの音

その瞬間、自分のいる状況すべて、忘れてしまつような衝撃を受けた。

涙を噎らすほど泣いてしまったからなのか。それとも、悲しんでいないのか。

彼女は“ここ”で、ひとり、違っていた。

誰もが悲しむしかできないこの葬儀で、彼女は、ただ、立っていた。

全国コンクールで演奏していたときの、しゃんとした姿勢のまま

で。
涙など、ひとかけらも見せずに。

そのとき僕は、この人が「ノンさん」なんだ、と悟った。
彼女の隣には女の人が、他と同じように泣き崩れていた。
彼女の大切な誰かも、この惨事に見舞われたのだろうか。
端々（はしばし）にそんなことを思いながら、彼女を見つめていた。

僕はこのとき、初めて洸の愛する人に出会って、また、心を奪われてしまった。

一度も目が合わなかったはずの、彼女の瞳に。

まるで、洸の想いを、僕が引き継いだように。

* * *

「それ以来あなたは姿を消してしまった。だから、探しました。やっと見つけたあなたは、あの部屋でひとりきりだった」

岬さんは続けて言った。

「僕は洸のように、世界中を探し回って年中ヒマワリを贈ることなんてできない。だからせめて夏の間だけは、ヒマワリを贈ろうと。あなたに気づいてほしいと、思いました」

気づいてほしい？

「あなたはどこにいても、ひとりなんかじゃない」

そう言って、こっちに向けたままのヒマワリを、私の手に握らせた。

「愛されていないなんて、思わないでください。ご両親もお姉さんも、天宮さんも、洸も、みんな、部屋に咲き続けたヒマワリのように、あなたを見守っているんですよ」

目が震えてくる。私を愛してくれていた人たちの顔が、心の中に映し出されていく。

「ノンさん、言いましたよね。二度とピアノを弾くことはできないって」

あのころの私が確かに愛されていたと思うことができれば、私は絶望から抜け出すこともできるかもしれない。でもそれは、絶

対にありえないことだから。

「ノンさん、あのころも今も、あなたはみんなに愛されてる。それが、分からない?」

震える目から、とうとう涙が零れ落ちた。

私は詰まる言葉を必死に搾り取って、言った。

「分かる……分かります」

「だから、あなたも愛してください。愛してくれた人、みんなを」

「どう……やって? 今ではもう……」

「遅くないですよ」

と岬さんは言った。

「あなたには、愛を伝えられるものがあるじゃないですか。遠くまで、空と海の向こうまで、音色を伝えられるんですよ。あなたは」

* * *

自分の存在を確かめるもの。

喜びを感じられるもの。

誰かに、愛を伝えられるもの。

「ノンさん、早くしないと遅れるよ!」

外から、岬さんの早い音が聞こえる。

「ちよつと待って。髪形がいまいち決まらなくて」

慌ただしい日常。

「お父さん、お母さん、行ってくるね」

いつもの日課。

「髪型なんて、誰も見てないよ」

「何言ってるの、優勝したらテレビに映るかもしれないじゃない」
久しぶりの晴れ舞台。

「自信があるよう」

「もちろん！！ 私には愛があるんだから」

私の足音が、鉄筋を鳴らす。

今日も、幸せな音色が響いている。

【END】

最終話・幸せの音（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
意見感想など、よろしくお願いします。

次回から、3夜連続でおまけの物語を載せたいと思います。

本編では描けなかったものたちです。

第1夜・岬さんが望の家を初めて訪れる日

第2夜・姉の心

第3夜・あとがき

予告

第1夜では、タイトル通り、岬さんが望の家を訪れるときを描きま
す。他にも、海で望が渡されたあのヒマワリはどうなったのか、な
ども書きたいと思っています。

よかったら読んでください。

特別編第1夜・岬さんの決断 前編 (前書き)

岬さんについては描きたいものが多すぎて、結局2回に分けることにしました。

本編とはまた違った物語をお楽しみください。

特別編第1夜・岬さんの決断 前編

彼女を初めて抱いた夜、心が震えた。

* * *

泷をウィーンで見送った日、父親が倒れた。病状はひどいものではなかったけれど、極度の過労が重なって、しばらくの療養が必要だということだった。

家は花屋をやっている、ここ何年かで規模を増やし、「フラワーガーデン」の名はだいぶ知られることとなった。すべて、父親が興じたものだ。

僕は花屋を継ぐ、と言ったことはないけれど、特にやってみたくこともなかった。大学では経営学を専攻した。

いつ、何が起こるか分からないからだったのかもしれない。

ウィーンに1週間ほど滞在して、父の体調もだいぶ良くなったので、僕らは日本に帰った。

「ノンさん」は、すでに帰国したあとだった。彼女はとうやら、あの飛行機事故で両親を亡くしたらしい。

帰国してしばらく経っても、父の体調は安定しなかった。何度か入院を繰り返して、花屋の経営がまるでできない。そんな状態だった。幸い、経営が上手くいかないことはなかったけれど、父が仕切っていくのはなかなか難しい、と、主治医にも言われてしまった。そうして僕の心には、ある決意が生まれ始めていた。

そんなとき、父が病院に僕を呼び出したのだ。

「おまえが今、何を考えているか、私には分かっているよ」

と父は言った。

「花屋を……無理に継ぐことはない。そんなつもりで私は花屋を始めたんじゃないんだ。自分がやりたかったから、やった。だからおまえも自分のやりたいことをやってくれ」

「それでいいの？ 花屋はどうするんだよ」

「私にはもう経営に関わっていくだけの体力がない。だけど従業員には恵まれているからな」

「引退して譲る、ってこと？」

「ま、そういうことだな」

父は柔らかく笑って言った。その笑顔は、淋しさをひた隠しているように見えた。

病室をあとにして、僕は考えていた。

そういえば、父は昔から花が好きだったな、と。

洸も、病室に飾られる花をいつも喜んでいたっけ。

僕は？

僕は、どうなんだろう。

家に帰ると、ウィーンで行われた世界ピアノコンクールのニュースをやっていた。

ずいぶん間が空いてるなと思っていたら、「今年の音楽を振り返る」という題目がついている。

季節はいつの間にか、冬になっていた。

年が明け、足早に1月が過ぎて、2月になった。

大学に入ってから花屋の手伝いを始めて、もう4年になる。

経営に関わる仕事をいくつか付き添わせてもらったこともあった。「潤さんはさすがに経営学を学んでいるだけある」と言ってくれる人もいた。

それでも僕は、僕の未来を花屋に集中させることができないでいたのだった。

まもなく僕は大学の卒業を迎えるところだった。

そういえば去年、初めて花の仕入れをやったな、と思い出す。

それは1人のお客の、難しい注文だった。

「ヒマワリがほしいんだ」

客は2月の終わりに、そんなことを言い出した。

「ヒマワリは8月だろ？ 今の時季、どこにも咲いてないよ」

僕は当たり前言う。すると、客はこう言い返す。

「本当に、どこにも咲いてない？ 世界中、どこにも？」

「おいおい、世界まわって調べてこいって？」

「うん、頼むよ。咲いてるところを見つけてくれるだけでいいんだ」

そうして無理難題を押し付けた客の要望どおり、僕はなんとかヒマワリを探し当てた。

だけど、残っているのは一輪だけだった。

「一輪でも十分だよ。ありがとう」

客はそう言って、あるうことが、自分でそのヒマワリを受け取りに行ったのだ。

客にとって、そのヒマワリはどれほど必要なものだったのだろうか、と思う。

後に、そのヒマワリは客の大切な人へのプレゼントだったのだと、僕は知る。

「ノンさんも、ヒマワリが一番好きな花なんだって。嬉しいな。俺のこと覚えててくれるといいな」

そう話す客は、本当に幸せそうだった。

そんなことを思い出していて、ふと気づく。

この間のテレビ。

世界ピアノコンクール以降に行われた、さまざまなコンクールの映像。

あれに、彼女が映っていなかった。

確か、前に洗に頼まれて調べたことがある。

彼女は小学2年生のときに初めてピアノコンクールに出場して以来、6年生まで全日本ピアノコンクール・小学生の部で5年連続で優勝していた。

なぜか中学生になってからは、コンクールに出場しなくなっている。

けれど、音大に入学し、新入生代表演奏をやっている。クラスも一流の音楽大学の中で特別扱いされているところだ。

今になって改めて調べると、さらにその後の生徒代表演奏を3年連続でやって、そのことから世界コンクール予選会の推薦をもらい、みごと日本代表に選出。

その世界コンクール当日、両親の不幸により、出場辞退。

その後のコンクールに、彼女はいつさい出場することはなかった。聞くところによると、今年の子選会にも、彼女の名前が挙がっていたという。

だけど、彼女はそれを断ったのだと。
そして、ウィーンから帰ってきて以来、ぱったりと姿を消したのだと。

僕は不思議に思っていた。

墓前で、涙を流すどころか、悲しみの表情さえ持っていなかった彼女が、両親の死でピアノをやめるとは、到底思えなかったのだ。

洗、どうする？

僕は空を見上げて、洗に尋ねた。

答えなんか返ってこない。ただ、僕は自分の気持ちを確かなものにするために、洗を頼った。

あの凜とした横顔が、忘れられない。

僕は、彼女を探し始めた。

特別編第2夜・岬さんの決断 後編 (前書き)

次回は姉の物語を描きたいと思います。

特別編第2夜・岬さんの決断 後編

左手には桜の枝を持っていた。

ここに来る途中、歩きながら桜の木を眺めていたら、持ち主の老人が分けてくれたものだ。

「花が好きなのかい？ 男の人には珍しいね」

と、枝の間からひよっこり顔を出して、老人は言った。

「家が花屋をやっているんで」

と僕は返す。

「花屋かい。そりゃあいい。1枝分けてあげようか」

老人はそう言っつて、枝にハサミを入れた。

「いや、いいですよ。せつかく咲いてるんだし」

「この桜は今年で終わりなんだよ。ワシにも息子がいるんだが、一緒に住むことになってね。ばあさんと長年暮らしたこの家とも、お別れになるんだ。だから見てくれる人には見てほしいんだよ。この桜が長いこときれいに咲いていたってことを」

老人は惜しむことなくハサミに力を入れた。そして僕に、それを差し出した。

「きれいですね」

「そうだろう？ 今年は一段ときれいに咲いたんだ。分かっているのかもしれないねえ、自分の運命つてやつを」

老人は桜の木を、愛でるような瞳で見つめていた。

洸、おまえも、自分の運命を分かっていたのだろうか。

ウィーンから帰国してしばらく経ったころ、洸の主治医が、僕だけに言ったことがある。

「洸くんが音楽の学校に通いたいって言い出したときがあるだろ？」

あのころから少しずつ、病気が進行していたんだ。お父さんとお母さんには、話していたんだけどね。病院を抜け出したときで、1ヶ月もつかどうかだった」

僕だけが、それを知らなかった。

「病院を抜ける3日前くらいかな、洸が『あと何日生きられますか』って聞いてきたときは、一瞬何も言えなかったよ」

と、懐かしそうに思い出していた。

ねえ先生。俺、あと何日生きられる？

……ははっ、何言ってるんだ。そんなことは分からないよ。せめて何ヶ月とかいうだろ、普通は。

1か月は切ってると思うんだよね。あと3日、生きれるかなあ。

おいおい、そんな弱気なこと言うなんて、洸らしくないぞ。生きるよ。3日でも1か月でも、何年でも。

ずっと生きられるなら、それが一番いいんだけどさ。でも、ちょっと無理っぽいから、あと3日。

3日後になにかあるのか分からないけど、結局は『生きたい』っていう気持ちが一番大事なんだぞ。

すると洸は笑って、「そっか、最後は俺次第かぁ」と言ったのだ。

洸の人生は、すべてノンさんのためだったように思える。

彼女がいなかったら、洸はもっと早くこの世を去っていたかもしれない。

彼女は、それを知らない。

自分が洗を、救っていたこと。

そして、洗に愛されていたことを。

あるアパートの、階段を登って、一番奥。

そこが、彼女の部屋だった。

見つけるのがそんなに難しいことではなかったのは、ここが彼女の親の持つアパートだったからだ。

ここまで来たら、もう引き返せない。

自分にそう暗示をかけて、僕はチャイムを押した。

「
.....」

もう一度チャイムを鳴らしながら、さすがにアポなしで来たのはまずかったか、と思う。

けれど、電話なんてもつとできなかつた。チャイムを1回押すよ
り、番号をひとつひとつ押すほうが、ずっと勇気のいることだった。
「
.....」

もう一度、もう一度、と押していたら、いつの間にか10桁の電
話番号と同じ数になっているのに気づき、はっとして、ボタンに触
れた手を離す。

それでもやっぱり反応がなかった。

「また明日にしようか.....」

そう呟いて、引き返そうとしたとき、不意に玄関のドアが開いた。僕が振り向くと、怪訝そうにした彼女と、目が合った。

「……………どちらさまですか」

そこにいる彼女は、別人のようだった。

10歳のころの、そしてウィーンで見どころの面影が、なにもなかった。

まるで絶望の淵にいるような、少し前の僕と、同じ顔。

あなたと出会う前の僕と、同じ絶望。

僕はそのとき、彼女を救いたい、思った。

彼女が、泷を救ってくれたのと、同じように。

彼女の後ろにひっそりと見えた、グランドピアノ。あれに、彼女のすべてがある。

僕は、彼女に伝えたい。

泷の愛と、「ノンさんのピアノを応援する」と書き残された、叶わなかった泷の願いを。

僕は左手に持った桜の枝を、彼女の前に差し出した。

「お花をお届けに参りました!!」

さつきまで泣いていたはずのノンさんが、ふふつ、と笑った。

「どうしたんですか？」

「岬さんが初めて家に来た日を、思い出してました」

「やっと思い出してくれたんですか」

「あのときもこんな風に、無理やり私に渡したんですよね。桜の枝を」

「ノンさんは僕が渡した1輪のヒマワリを、太陽にかざすように見

た。

「何なのこの人って思いながら、私は桜を受け取ったんですよね。あれは、自分でも無意識だった。たぶん、冨と重なって見えただと思うんです。冨のこと、忘れてしまったように思えたけど、心のどこかに、ちゃんと、あったんですよね。私が冨と過ごした記憶は」

そう言って、彼女は優しく笑っていた。

「冨はヒマワリが好きだったけど、やっぱり私にとっては、桜の精霊だよ」

空と海の向こうに、そんなことを言っているのが聞こえた。

「岬さん。冨に“これ”、あげてもいいですか？」

と言って、僕のほうを振り返り、ヒマワリを見せた。

「はい。冨、喜ぶと思います。1週間前ウィーンに手向けたヒマワリは、もう枯れてしまっただろうから」

僕がそう言っていると、彼女は再びくるっと背中を向けた。

そしてヒマワリを、海に投げた。

「空と海の向こうまで、冨のところまで、届きますように」

ヒマワリは流れ、そのうちに見えなくなった。

特別編第2夜・岬さんの決断 後編 (後書き)

言葉が足りないところもあったと思いますが、これで岬さんの物語は完結になります。

次回はついに、最後の物語になります。
お楽しみに。

特別編第3夜・姉の想い（前書き）

ついに物語はすべて終了となります。

ただ、今回の姉の視点から描いた物語は、あまり最後にはふさわしくないものになってしまいました。

最後にこれかよ、って思う方もいるかもしれませんが。

でも、こんな想いをした人もいるということで、このまま載せることにしました。

最終的にハッピーエンドで終わってはいるので、これ以上は手を加えないつもりです。

次回はあとがきを載せようと思っています。

特別編第3夜・姉の想い

初めから、すべて知っていた。

* * *

ある夏の終わりに、こんな話を聞いた。

「どうしてお姉ちゃんなの。なんで、あそこにいるのは私じゃないの。そう思ってしまう気持ちを押さえ込んでいると、姉は私に向かって、笑顔で手を振ってくるんです。その瞬間、お姉ちゃんなんかいなくなればいいのに、って、私は思ってしまった」

少しだけ開けた玄関のドアを通して、大好きな妹がそう話すのを、私は耳にしてみました。

お姉ちゃんなんかいなくなればいいのに。

と、たったひとりの家族が、言っていた。

1年前、両親が飛行機事故で死んでしまった。

私は死の悲しみから立ち直ることができず、しばらく家に閉じこもって過ごしていた。妹もまた、ひとりでアパートに移り、そこから出なくなつた。

そのとき私は、思っていた。

「なぜ、この家から出て行ってしまったの」と。

両親がいなくなった今、残された、たった2人の家族が離れて暮らす必要が、どこにある？

私には、妹の考えていることが分からなかった。

「ひとりになって考えたいことがあるんじゃないのかな」

と、ヒロは言った。

「でも、この家にだって望の部屋はあるんだし……」

「叶には俺がいるじゃない」

「……そうね、分かったわ。けど、望のことは放っておけないから、ときどきはあの子の家に行くてくるわ。望、掃除とか洗濯とか、好きじゃないし」

「うん。それがいいよ」

ヒロは私をぎゅっと抱き寄せた。

私は彼の腕の中で、安心して心を静めた。

* * *

私がこの家に来て来たのは、11歳のときだった。

3歳下の妹は、「よろしくね、お姉ちゃん」と、私に握手を求めてくれた。私は嬉しくて、すぐに彼女のことを大好きになった。

望の部屋には大きなグランドピアノがあつて、彼女は私にピアノを弾いてくれた。

「すごい。のぞみちゃん、上手だね」

私は曲の終わりに拍手を贈った。

すると望は得意げに、

「私のピアノの先生はね、となりのおうちに住んでるの。あっほら、あれが陽路くんだよ」

と言つて部屋の窓から、ちょうど家に帰ってきたばかりのヒロを呼んだ。

私も窓から顔を覗かせると、望の声でこっちを見た彼と、目が合った。

きつとその瞬間、私はヒロに恋をした。

私の想いが叶ったのは、望が音大を卒業するころだった。

「出会ったときから好きだった」と、彼は言った。

私は、彼が私と同じ気持ちだったということが本当に嬉しくて、幸せだった。

両親がいなくなつてしまつても、望とヒロさえ、側にいてくれれば。

そう思っていた。

* * *

玄関のドアの隙間からは、部屋の中の声が、静かに聞こえてくる。

「墜落現場に着いて、姉と陽路くんを見つけたとき、2人は抱き合つていました。私は初めて、知つたんです。陽路くんが愛しているのは姉で、2人は同じ気持ちなんだつて。私の陽路くんへの何十年

もの想いは、いったいどこへ行くんだろうつて思った。2人を見て
いるうちに、残された想いは、とうとう絶望に堕ちてしまった」

私はそこから動くことができなかった。

ただ、望の話す言葉ひとつひとつを、理解しようとしていた。

望が、ヒロを好きだった？

そしたら、私は望から、ヒロを奪ったことになるの？

思いもしなかった、妹の言葉。

私はそれを、黙って聞いていた。

「もう二度と、2人の幸せな姿は見たくないって、思いました。だ
から私はあの家を出て、ひとりで暮らし始めた」

あの家を出た理由。

「ピアノはもう二度と弾かないって決めたのも、そのとき。私がピ
アノを弾くのは陽路くんのためだったから、もう弾くことができな
かった」

ピアノを弾かない理由。

望のすべてが、分かった。

私は静かに、そこから離れていった。

これ以上何かを知ってしまったら、私は引き返してしまふ。

やっと手に入れた、幸せ。

幼いころから施設で育って、それを原因にいじめられた日々。

私にだって、幸せになる権利はあるのだから。

2日後に迫った、私とヒロの結婚式。

心がくじけてしまう前に、私は幸せを手に入れる。

大好きな妹の、気持ちを知ったままで。

あとがき（前書き）

感想というか、裏話になっています。
完全に自己満です。

今回で、連載がとうとう終わりを迎えました。
次回作も近いうちに投稿したいと思っています。
そのときもまた、よろしくお願いします。

ここまでお付き合いいただいて、ありがとうございました。

あとがき

まず、タイトルをつけるのが得意ではない。

まして、物語の展開を分かっているうちにタイトルを考えると
いうのは、私にとつてとても難しいことだった。

だからといって、あとから変えるのも好きではないので、初めに
つけた「響く」にうまく繋がる終わり方にしなければ、と思う気持
ちでいっぱいだった。

この物語は、もともと第9話「洗濯と選択」まで、描いていた。

そのころはこんなに長い話になるとは思ってもいなかったし、物
語の内容もこんなに濃いものになるつもりではなかった。

まず、岬さん。初めの設定では、「彼は花屋を偽っているが、実
は有名な指揮者で、望にもう一度ピアノを弾いてほしいために花を
贈り続ける」というものだった。

だから、洗の存在もなかった。

洗を出すことになったが、望は岬さんとくつつけるといのが初
めからの設定だったので、両親を飛行機事故で亡くす、という設定
を思いついたときに、洗も一緒に死んでもらおうと思った。(残酷
?)

ちなみに、洗を出そうと思ったとき、すでに岬さんと双子である
という設定はあった。

姉が施設からのもらわれっこというのも、あとから生まれた話だ。

そして、毎日更新はらだったため、この1カ月半、常にパソコンを開
いていた。

書き溜めをしていなかったなので、その日その日に更新した物語は、
だいたい昼間、学校の授業中に描いていた。

後半になると、更新時間がだいたい11時55分過ぎになった。

最近では、11時59分に更新しようという、私の中の勝手なゲームさえ開催されていた。

とにかく、物語をすべて書き終えたときは、嬉しい気持ちでいっぱいだった。

最後に、途中からずっと、思っていたこと。

「これは恋愛小説なのか」

については、分からないままになってしまった。

以上であとがきを終了します。

読んでくださってありがとうございます。

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217b/>

響く

2010年10月8日14時05分発行